中村俊定文庫
文庫 18
894
1

序

元禄間芭蕉翁首唱正風俳歌與三四才俊俱敦動一世但翁之意不在名利而在禪悟故觀世之無生以芭蕉之脆自命其名云豈非然哉然翁之句沉雄古健猶如萬尋之松貫四時而不凋且夫其角之華麗如早梅之破蕚而璀璨於水邊嵐雪之清秀如脩竹之抽梢而瀟灑于塵表繼之而起者去來之幽雅如蘭丈草之泠淡如菊皆其選也往時嘉永癸丑丁去來丈草百五十回之忌來歳安政丙辰又為其角嵐雪百五十之忌吾友悍庵主人撰翁及四子妙句

為二巻。須諸同社。社中子弟。鏤金刻之。以修其祀。其意可欽也。余最欽翁之道。年盛一年。翁之徒。日多一日。是翁不求名利。而名利自至者也。吁嗟乎。翁之芭蕉之脆。變為勁松。四子之名。又成四卉之美。豈不盛哉。故序。安政乙卯嘉平月。枕山仙史撰於江戸下谷三昧橋假館。

蘭洲處士達書

元例

一祖翁の發句追々增補仕候ゆへ、ときどき新作を加へ、或再案本句仕候ものも多く、又延寶天和の作は其再々案の句ぶりは門下侍客の表後ろ又異同仕候ゆへ、其の裏候ふきよ仕候ゆへ、原本よりは仕候ゆへ、法帖の扱物ゆへ、て校正しその多きを泛ひ異同を屑上よ志ル

一發日記　泊船集　句撰　發句集　同拾遺同追加本をもとめ化の句の後りを、一句の八九句の一句集ものいき、加ゆるの二四巻句ぶりなるもの、多本号殿々省中云々ゆへ人口よ膾炙ス

一其角の自筆の五元集句の乱雲去東丈の三撰句数多ゆへ、ときれハ後学ゆ又ゆ、ゆ校ゆ人補ひ申ス

一翁四哲畧伝

俳書翁松尾氏名宗房伊賀国柏原村に於て生れ村人寛文二年芭蕉堂
蔵主郎良精始良忠と称す同六年良忠歿早世するに及て同弟
仕を辞し洛に学び和学を北村季吟に学ひ傳を田中桐江に学
ひ書を小西来山に学ぶ在京七年寛文十二年東武に下り延宝二
年蕉雨に参し天和元年深川に卜居して芭蕉庵と号す同八年門
寺仲頃和尚に参禅し大悟の後西行の体裁を学ぶ又画を狩野
洞雲に学ぶ（サレト延宝中ノ自画賛アリ洞雲ヨリ画ヲ学ヒシナルヘシ）貞享元年甲子紀行同四年花
島紀行又知客紀行同五年更科紀行元禄二年奥細道同三
年幻住庵紀行嵯峨日記あり供書に新月別風羅坊泊船堂瓢
竹庵再拾庵桐之葉夫子軒斧名庵蓑虫庵枯淡子蕉雨
亭人称数号皆号を称七年甲戌寛延五月深川に於て歿し

九月の末大坂に於て重病なるを聞て十月十二日京に入て
近江に赴し今年享年五十一遺命にて近江粟津の義仲寺に葬
し奉る

其角榎本氏（母方之姓 本姓竹下）名順哲東作（赤子）の男母に儒を服部嵐雪に学
ひ蕉を学ぶ彼に学ひ侍を大嶺和尚に書を伊藤信徳に学ぶ
又日蓮ノ書風ヲ好メリ 延宝の末祖翁に門に入り二十歳仏に帰合（時年十七と号す）
一つに号子又画を英一蝶に学ぶ墓を云 狂雪堂 狂而堂
蕉翁庵 文会庵 寒雪翁 京井（吠二号八来元章ノ硯ヲ得テヨリ称ス）数号
皆嘱を学ぶ英を伝 田舎句合 嵐雪集 俳諧集 萩原 松尾 句兄弟 新
続虚栗 いつを昔 雪橋 雑談集 萩原 松尾 句兄弟 新
続猿蓑 祖翁滅後 変風を去来仏作 海内を周ひ歩行七八年

撰あり江戸城江丁より出火坂本町より發す
寛永四丁亥年二月廿九日享年四十七歳板上行寺に葬す
嵐雪服部氏淺草小板橋村人家窮て江戸に来り素堂に仕ふ
後事しを後祖翁の門に入り雪雪門人と号
す妻烈風爲て元祿十二年發す子俳諧を和尚に奈禅
て開悟す其義雪 雪華堂 雪華尾
仏山居士の数号ありて又画をよくす云 雪華 寛美菜
家水 一周忌 杜撰集 或問集 ホを著す 江戸石町三丁目又
深丁に住す 寛永四丁亥年十月十三日發す享年五十四駒
込常泉寺に葬す

吉未向井氏名曲時字元澗号義雪子通称平次郎紀尾井
明人父に学ぶ俳学を研究して侍職なりしを軍学
和歌の術を兼ね性温厚の人なり壁に住ふ貞享の初祖翁の門に入り
さらに一つの聖境を拓き俳諧の義地を独り得たり
属スル所 号を伊勢紀行 撰集 旅寝編 ホ来物語を著す
寛永元甲申年九月十日發す享年五十四本山法妙堂中国寺
に葬す
父元升字は長崎に居て聖堂を建る兄元瑞号仁斎子又
雪雪 幼住庵紀ノ踏ヲ作ル 跡を業に典業に住し益壽院法印に叙す
弟元成名兼九号禅学子万に奥丁に住の跡業を継ぎ長崎の
聖堂に居す移居弟元升に異す

[illegible]

丈草門蒙氏尾張犬山の士居寺住[illegible]仕[illegible]孝思[illegible]
ゆりて貞享元年武を辞し京を発り玉堂和尚（黄檗流神護山）
先聖寺住）に参禅す偈曰。多年厦屋一切牛。化似[illegible]蛙蝉。得自由。大宅界
惶延徠盡偈尋[illegible]法雨入林丘[illegible]分をこのくす深安おのおのすれ[illegible]
[illegible]の社[illegible]の[illegible]平刺[illegible]の[illegible]人[illegible]和澤の[illegible]
を経て延江栗津[illegible]より尾を結び伊勢尾[illegible]号[illegible]又懐寛
懐栄懐[illegible]の云師菊の城後冥福の為[illegible]三年閏[illegible]一石
一字の法華経を[illegible]塚を[illegible]又[illegible]を[illegible]門
人[illegible]追福[illegible]集す[illegible]元禄十七甲申年二月[illegible]
寿享年四十四回国[illegible]契[illegible]長[illegible]山[illegible]馬場村[illegible]塚の傍に葬

正月　元禄二年閏正月ノ吟ニヤ

元日　秘蘊集泊船集ノ撰ハ元日ホトヒリ木曽谷ノ意塚集ニハ元日ハアリ

句集[illegible]ニ作ル諸話ニ[illegible]ト云音便ト云リ

一翁四拾集上

惺庵西馬著

春の部

西南の[illegible]英[illegible]ると[illegible]和　宝[illegible]　自　祖翁

元[illegible]ら因毎の[illegible]

元[illegible]おの[illegible]人[illegible]秋の[illegible]れ

元[illegible]　自見ぬ人の指[illegible]寺　其角

元[illegible]の[illegible]英[illegible]ら十[illegible]指[illegible]

元[illegible]　家[illegible]濃[illegible]の[illegible]刀[illegible]ん　去来

元[illegible]　山[illegible]の[illegible]る新[illegible]

元[illegible]　時[illegible]雀の[illegible]

[illegible]

立春　赤州紙ニ春立ちの字をふくきとりて鵲尾冠ニハ似合ーやト有泊船ニ年立ちや作句選ばり年ふくニ作ル

今朝春　句集共ニ泊船句撰ニ改ト誤ル句解説最トモニ謬ヲ傳テ又今朝ヲ花トス既ニ続虚栗ニ形ヒテ証トスベシ

花春　其他花摘又渡海ノ文ニモ初五蔦ヲ著ストアリ泊船句撰初ヲ誰人ノ作ハ誤リカ

春立ちの中新年ふくきて来五升　菊
嵐雪
ふるきとりて鵲尾冠
花ちるの頃小袖を
作ゆくうかるちみ紙ふくの春　〃
春の鉢彼をーちんと春友の
来りて酒興ーきふ元ちの春
ちる新年あけちの月ちつーて
二ちゆるぬのうハちーふ花の春　〃
京ちのきふ年をとりて
ちりをちる新人いちる花の春　〃
面ーの蜂をはちふやを花の夫　嵐雪
五十ちる四ちを月ちうちの春　〃

千代春　伊勢の春ちの千代の春　菊
日春　日の春をちるのう鶴のあゆく巣　其角
伊勢春　南人社宮吉ゆめの中伊勢の春　去来
江戸春　縁ちちうちぬはーはーの春　其角
年立　年既ちの頃の稽ハ不ーー角衣　〃
年明　初ちやちちを遠方の庭用の所　嵐雪
初空　白粥の夢稽ちをふーー初日ちの中　〃
初日　三ちの朝ちちちを月ちやちん　丈草
三朝　ちちちを夕ちを月ちやちん　嵐雪
初夢　ちちちを新ちあるる屠ちを　其角

宝船　宝船句作ニ月ヲ歳旦ニモ歳暮ニモ成ルベシ

伊勢ちの春ちの中ちの千代の春
日の春をちるのう鶴のあゆく巣
南人社宮吉ゆめの中伊勢の春
縁ちちうちぬはーはーの春
ちちを中年既ちの頃の稽ハ不ーー角衣
初ちやちちを遠方の庭用の所
白粥の夢稽ちをふーー初日ちの中
三ちの朝ちちちを月ちやちん
ちちちを夕ちを月ちやちん
ちちちを新ちあるる屠ちを

追書略

須磨明石尺ぬ森ちの後中宝船

嵐雪

若水

庭竈　正月奈良三庭井ロリト云フアリシヨリ始ル

松飾

門松

飾竹

蓬莱

若水の鏡を磨（トカ）ん人々や
うきを屋うり新年ゆ[illegible]の
御殿のあり[illegible]を今日
数多ゆく紙ゆ氏や屋のもと　菊
屋のもと牛ゆ雑煮を煮（スロ）り市雪　其角
屋うあり
いく雪うきを待芭蕉の松のうり　菊
松のもう[illegible]を求ふ人々を雑　其角
角屋の[illegible]ふ人　門の松　玄来
神角ゆ居をしめ
行会の松ゆうきこのもう外　其角
蓬莱ゆきのもゆ伊勢のもう仮　菊

喰積　喰積ハ蓬莱ト一物両名ノミ

年神

[illegible]仮の[illegible]松をたゆ方紫の
[illegible]ゆ[illegible]の[illegible]
[illegible]蓬莱
枝紫万雪[illegible]
[illegible]き[illegible]
蓬莱の松うたゆ[illegible]松の松　千角
蓬莱うこの[illegible]ゆ[illegible]ゆ志う納　玄来
[illegible]喰積あり[illegible]夫婦[illegible]　嵐雪
雑煮人福の神を祭りて七人う
[illegible]中ゆ大黒[illegible]
ヤ[illegible]
年神ゆ松の口ぬく小松[illegible]

万歳

破ノ方　自註ニ三代四代住吉ノ人當時四人の高老を祝ひたまふ

筆始

楪

歯朶　延宝九年ノ東日記ニ結ふトアリ

句撰二年の暮ト誤ル

室引

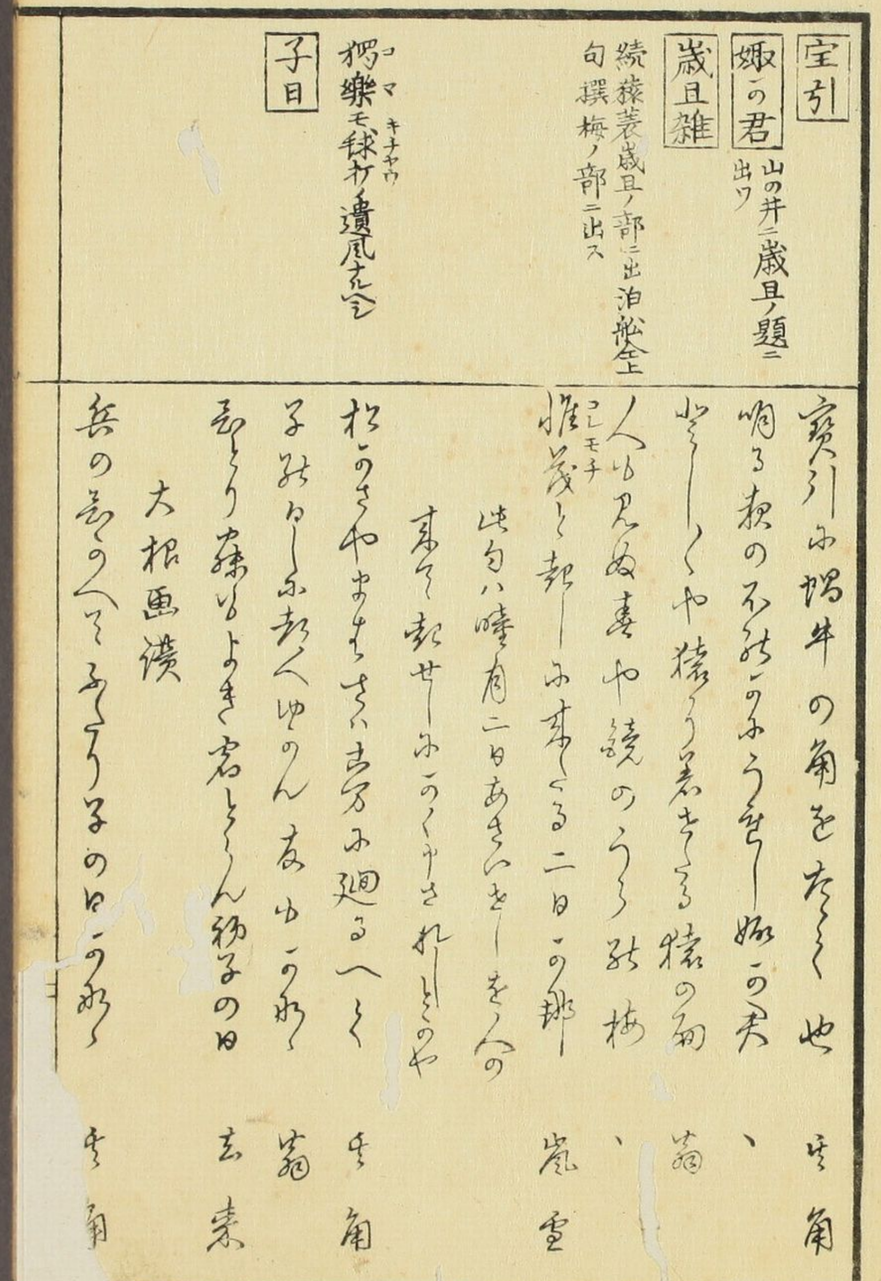
娵の君　山の井ニ歳旦ノ題ニ出ツ

歳旦雑

続猿蓑歳旦ノ部ニ出　泊船全上句撰梅ノ部ニ出ス

子日

猶樂モ球杖遺風たゝ(キナヤウ)



春下

傀儡師

孟春雜　答の小文に初春下前書アリ歳旦に出セル集アル誤リカ

亡母初の女ないさのをんな

うゑをきてのち

ゆかりあるものゝ初子の玉箒　嵐雪

ゆかりなきのを告げ尾上の春如鶴　千角

傀儡師の門を小唄の風　〃

妻ゆゑ出さるゝ九日の明日の朝　翁

雲ハ空ゝたゞ半さゝ山角

土用あけ半夏ひゝ雨あり

余興あるまゝ

妻ゆゑ八ゝちゝ生きぬゆゑ

乙鳥赤紙の紙

梅の葉鶏子の岩社ゝ後ゝ汁　翁

集尾琴に早船の記アリ

踏歌

歌人

廿日正月

嵯峨ゆゑ

ゆゑ紙ふ丹波の蕨ゝ

亜賛　去来

浦ゆゑ

淀ゆゑ川　侍

河ゆゑ柳　千角

冥居　〃

移ゆゑ

行人の門あ

帯をぬゆゑ

蕨入十ゆゑ

西方ゆゑ廿日ゆゑ

丈芝

千角

〃

嵐雪

御忌

人の世やのこの高台寺も年　玄角
雪吟勧進歩
和歌の浦四つや出雲の八重霞　菊
春あれやなほ名ある山の桜ゆえ　〃
大比叡やしをり引きそ桜霞　〃
春雨の高の宮のまもるとハん雲のこの方　玄来

霞

延宝年江戸廣小路集ニしの字を引てトアリ

春風

春風やハ人知らぬ笠山　菊
春の石を引切る別世の外　嵐雪
比丘尼八門人集の旅立ちるふ螺石哉

春雨

笠の小文ニつゝみはゝ水代トアリ泊船句拙ニつゝる雲代トアリイニつゝふ東ニ作ル

猿蓑ニ前書アラズ

深川草庵

おくるゝ人のこゝろ
春風ふく吹出されぬ水の如蕉　玄来
笠寺や雲なき雨の霞もそゝぐ　雲
十四五日清水
春雨の木下ぶしにぬれつゝ　〃
ぬれつゝ雨や蓮を伸る仲の花　〃
和坂庵ニ
ふけ行やこのまゝ雨にぬれつゝ　〃
はるゝ雨や暮ぬ人ぬ川柳　〃
春雨や蛙の業作ふ屋根の滴　〃
古のこゝろ国中ゝ之学の

浮返

[illegible]

春夜

[illegible]

春月

春水

[illegible]

[illegible]

初雪

[illegible]

点印半面美人の字を彫て琴形

[illegible]

万句の御発句に押弘め給る[illegible]

春の月　琴[illegible]物書[illegible]められ

影水

[illegible]川春[illegible]水平鮫の[illegible]

凍解　小文庫ニカク出熱田三歌仙ニ露凍テアリ

凍とけて草ふ汲る清水哉　苔

雪間

残雪

木枯の跡や伊吹の雪　丈草

呂丸追悼

踏きゆ雪ふ多数中雪ふの跡　去来

移動て島を見出る雪間の水　生角

雪ふ家の八路ふて

ひとゆふ跡ふつき出る事ふ哉　苔

入このるる日ふ糸遊の多数この水

枯芝や　〃

伊賀新大仏寺

丈六ふ一石の人　〃

俗名山椒窟

暮春ト題アリ

糸遊

陽炎　笈小文ニハやゝ沼美ト アリ　賜望ニハまゝとゝ

小文庫ニ文アリ泊船句撰ニ丈六ホトアリ笈日記ニ丈六のトアリ三卅番ニ曰丈六ホノ方ニ定ルト見エタリ

句選ハ肩ハあるハ誤
猿蓑泊船集ニ作ル句撰集ニ
作ル集ハ書損ニテ
イニ小殘の砂ニ作ル
韵塞駕トアリ句集馬
トアリ

七種

若菜 壽若菜ニ莫蒻トアリ
忘水ニ初ゝ峰ハトアリト云

陽炎のわの肩うたつ跡ゑ孔　丶
このあるふハ崇胡の原ゑ蕨ゑ　丶
陽炎やゆ殘の奥ゆ吹ゑて　青角
このけ跡ゆ見ゑ見ゑ　去来
かゆゑ見ゑ　蟬の巣ゑ　丈芝
蕪菊の墳ハ結て我ゑ思ハ
陽炎やゑ蕨ゑハ結ゑ　丶
四睡園
このゆ跡ハ蕨ゑ動ゑハ帝の耳　青角
七種ハ跡ゑ蕨ゑ　丶
七くさハ吹ぬハ聲の　丶
あんハゆゑハ壹ゑ蕨孔　菊

句兄弟ニ菜つゝぶより
句集ニやらうトアリイ本ニ
やゝんトアリ

齋

俳諧曽我 柱暦ニ古畑やより
句撰古畑ハトアリ

雜菜

畑ゑ孔ゑ跡中蕨ゑ蕨菜つゝ　青角
傘一ハハ　丶
蕨菜ハ　丶
四方ゑ蕨ゑ　去来
古畑ハゑ蕨ゑ孔　丶
一ゑゑ一跡ゑ蕨ゑ　丶
ゑゑ一蕨孔ゑ匂ゑる蕨ゑ孔　青角
ゆゑ孔ハ蕨ゑ　去来
懐ニ菊ゑ家中　オモフ
紙ハゑ菜ゑ　丶
石川北鯉生の金井山居ゑ我
つゑ孔ゑ熱めゑゑ芽の長さ

芹

娵ソシり堤

梅 延宝六年三百韻ニ見エタリ

元禄四年忘梅ニアリ

甲子吟行三三井秋風ノ鳴滝の山家を訪ヒアリテ梅林ト題見エタリ

梅打て樹ふかくなる 秋こうめ、 蕾
山里八方き[illegible]の花、
高良みて
河あくさの心あさきを梅の花、
山志
手洗(バナ)の上きく人梅のさかり外、
行賀の山あらうみくいふのあり
出屋より松ちて蕾を石
水河くさ本みあるを墓ふ
しくさあきあり竹のこの
高梨野也見を考て四方を
石岩をを地あり山のふか行て味

十

泊船句撰六門入行うしろ
のくふてるをるのをををを
をををををををり真蹟六冬
をトアリ

國山のくを焼ふををををいあり
をうふあらふ松品の梅打花、
一ををを影の宮ロ梅森キ以色
みををいり腸の伊ふ初人ふあり
行をふ木の長をちのあ[illegible]ふ
をを我手発を紛を生を
ふををを人義の中ある梅のを打、
子良鉸のう[illegible]梅あをを人を
河子良子の一ををゆの一梅の色、
網代氏新ら良う色て
梅の朱う打ゆう末やらあの色、
里ふをを梅打のをを井乃鉸、

菊塵ニ物ヲのゝト了リ

続虎栗ニ遊ニ大音寺ト前書アリ

国女子

霞籠の奥ものゆの一山の梅　菊

玄蕃ら併へまき人の子孫ら言

生ちたるこゝ

菊籠のさきゝ言ふ事ゝ梅の花、

何の一新八幡宮の二有分ものり

しを一周忌のるゝふ父梅九子

のこうゝ人や法の八一ある

梅ゝふゝ梅の一字ちまを、

ふゝあゝふゝ日の出るい絵ゝ、

ふゝうゝま梅の碧(サケ)自や梅の色　寺南

梅ゝふゝ不元意の部ゝ歌ゝ、

宰府奉納

梅の枝の遠ちまゝ望老賞、

時をちゝ目出ゝ梅のゝゝ、

送別

ふゝゝ梅折ゝ言ふ第、

寄のうめ概(ヒ)のゝかゝまこの枝、

菊百ヶ日

墨の梅まゝ中ものの花、

久松肅山高ゝ

梅まゝ本宮の木の白ひ紫、

元禄十四年二月二十日聖廟

ばる歌河辛忌於龍戸御社

類柑子二あのちる事もとアリ

元祿乙未芳坊丁ト居頃カ

イニ三ヲんつ〻二作ル

詩歌連俳会興行一座

梅ちる所　　〃

百八のうち〻まこと中寄せうめ　　〃

家毛ちる中隣ハ荻生惣右衛門　　〃

梅ちる中ゆ毛ちる藤を落の藁　　〃

家毛一塚一ヲんちるのあ〻ちる　　嵐雪

荏柏天神奉納

ちるを梅こうけまさる涙哉　　〃

毛のゆのめ背中を梅の木枯　　〃

梅ちるや豆のあるのちるのま　　〃

部屋梅

ちる〻ちるの毛を作ル中梅の花　　〃

桐雨ぬ一京うちちる〻ちる出ぬ

ゆのうち社豆ちるく知人ハちる

ちるちるの中ハこのうちくゆひ

めちる中一ちる和の花の雪消

五角百のちる〻ぬちふ俳り

ちるまへ人ちる〻ちる毛〻て

梅ちる中ゆ弱中わちる事きちめ　　〃

ヲ蕪の山荻ゆ中一〻中ちる

候し一作り

家めちる毛中山絵猟入る　太のちる　玄来

毛ちる〻毛中毛梅の中ゆ毛ゆ　　〃

ちる涙ゆ海ちる事ちるめの花　　〃

狩装猟入二作ル集分入二作ル

月梅

竹美戸のあるじ　梅の花　文蔵

庫脇ハ梅さく方の岩ひ茶屋

結ひ八梅ゝ引うの茶摘子朱

寺納

ゆめゝ寄立の紅梅の切

屋敷の空ゝ新春を賀す

江戸柏の梅ゝ咲ゝ煙草

水仙ゝ紅ゝ八幡ゝうめのゝ

菊のもの一を和ふ

梅ゝ寄ゝ寄ゝ梅の花のちゝ茶

春日中市ゝゝのふ角ゝ梅　菊

寺結ひ結ひ角待

野山家二大顛和尚追悼文

梅抑　天和二年武蔵豊島郡ゝ寺ゝ切ゝ切ゝ切ゝ切ゝ三段切トシテ手ホ巣ノ難カル〇韻塞ニ緩歩ト前書アリ

角結和梅ゝ寄ゝ寄ゝ切ゝ小山伏

河書略

三日角の寄ゝ切ゝ一筆の梅　玉南

和心水推敲之句

たゝゝ吋よゝ角ゝゝゝ梅の門

掃ゝ結ふ梅を抜ゝ寄ゝ角結ひ　嵐雪

菊の春日中ゝ角ゝゝ

ゝ球ゝ玉ゝ白玉味ひ

味ゝめ玉ゝゝの小角の小石ひ

ゝめ柳ゝ玉ゝ玉ゝの九女ゝ

ゝゝゝ寄ゝ角ゝ梅ゝ　菊

在原寺ゝ

柳

天和三年ノ虚栗ニ出ル

有磯海ニハさゝる柳トアリ文庫ニ柳のさゝらト改出タシアリ

[illegible]

接部ノ第一

[illegible]柳ハまのさゝへし

杜國

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

淺妻船ノ賛ニヤ

集尾琴ニ序詞アリ

初蟬ニ戸ひらぬトアリ

柳ハ鞦ならぬ[illegible]

終塚の賞ある世[illegible]

柳ニ遊園

遅さるハ語の新見る柳の形

詞書有今昭

懷のさる[illegible]

山更上京

黄き[illegible]わの柳[illegible]柳の[illegible]

曲さる世[illegible]柳[illegible]

五六本よりて[illegible]柳の形

庭[illegible]

[illegible]柳の[illegible]柳[illegible]

去来

椿

笈小文ニ芋植て門ハトアリ笈日記ニ藪椿トアリテ共ニ春ノ部ニアリ泊船ニヤヤ後ニ出タル集ニ女貞ト見テ夏季トスサレトモ草ノ若葉ノ掛合ニテコレハ野椿ヲ云ルナラシカ

畠打

種下

姑の寐入りて見ゆる柳かな　、
引すてゝはなしの種や椿かな　丈草
黄昏の笠ぬきかけし椿かな　翁
紫に見えし椿や花の全盛也　、

二乗軒

藪深き門ハむかしの椿かな　、
落かゝる水のうはさや花椿　、
灯もし得ちりや白き衣の東横　去来
紙のふちに月見ゆし花椿　嵐雪
うかくと日暮れて開く椿の花　去来
椿の中大神宮へ行つのる　其角
拝殿や雨のめでたき椿かな　、

若草

春草

獨活

蕗薹

土筆

種蒔し後より飛ぶ小橋かな　、

圃角扇に讃を望まれて

若菜摘ミ若菜のあそびかな　翁
木曽の情雪や生ぬく春の草　、
雪間より薄紫の芽独活哉　、
山里の名もなきのしや独活うど　其角
きのふまで分ハ薺に独活　嵐雪
鶯の夜や柳を蕗や蕗の声　其角
蕗の薹見ても人のなつかし　嵐雪
野萌はいせ銭ほんつくし　其角
ほのくと橋やつくしや土筆　、

餞別

ん美うの生ゆる五葉うゑくゝし　丈巨

菩提山

山寺の炉（カナ）ゝ告ぐゝ鶯ゝ　菊

鄙（シナヒ）ゆくゝ人ゝ　嵐雪

相國寺にて

うゝ忘れぬる行の末や　菜

菊の中　柳のゝ一枝　蕪の　芋

くゝ忘れぬや　緑ゆ蕪ある　柳の　芋

うゝ忘れぬ　鶯の　忘れ　きゝくゝ　芋　蘭

黄菊や　蘭ちゝ　国の　ひ　芋

うゝ忘れぬ　菜ゝ　ん　蕪のあや

止ル丘隅二一

野老　茂のゝ文六ゝ山のゝ　ア り茂昔記二山寺ゝ

蕣立

鶯

類柑子ニ春暖閑炉ゝ雪ゝ

前書アり　角ゝ吟ノ終りゝ

菊の分を選ゝん　ゝ　ゝこの

うゝ忘れぬ　ゝ　ゝいゝ　ゝ　ゝん杉鉄

菜の中ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

菊の中　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

菜ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

うゝ忘れぬ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

黄菊の中　十日ゝ　ゝ　ゝ　梅

菊ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

うゝ忘れぬ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

菊の中　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

故赤穂城主浅野少府監長矩

之舊臣大石内蔵之助等四十六人

同志異体報亡君之讎今茲二月
四日　官裁下令一時伏刃
齊屍首葬之のさへつり鬱屑を
拂ひ芳吉をそなふ法なる祝ハまことに
冨森春帆、大高子葉、神崎竹平、
ちらう名ハ焦尾琴ふるおり
ゆうえをする
夢うつつ息たる山深の風　嵐重
うつつ面たやめ境の面たたる吉
夢さまふ世ハ　むつ雀
うつつひたの者ハ　ちそ見重小摺紙

晉子三七日
夢やめうつつ法の夢
うつつ面たる社宇ハ宋森
うつつひたの旭まつ吉や品の底
夢やめ　たそ見重ふ桂うつり
うつつひたの俗や紛ふ法ふみ
黄昏の中ハ宇ハ夢の重
夢の吉法ふ法ふ世ハ二日
夢やめ　四ふ俗ふ世ハ雪の重
風吹ふ基の乗ハ見んふ面ふ
のうつて出まるつ
夢の人の吉ハ法ふのうめう時

猫戀　猿蓑ニ恋トアリ句拼ニ恋や続鑑ニハ誤リカトアリ共ニ誤リカ

雲雀　鶯集ニ水百ヨトアリ続霊葉ニ百キ日キトアリ

菜の末畑の新角　丈芝
芽ぐむ反ぢや麦の風ふせき　、

田家

妻めしふやぢや恵う移ぢの妻　菊
猫の恋ぢやむ付屋のおろ話角　、

近津恋

京所の猫このよ恋う　扇屋町　千角
うき女ふこの恋ぢ　猫の恋ぢの　吉来
仲ぢ中ニ延あぢ恋む　猫の恋　、
好ぢ一ふすて　ふうの恋ぢ移ぢ恋
野ぢ猫ぢやうの恋ぢ　松の中　丈芝
なくのきりぢ恋ぢ　ぬ雲雀ぢ　菊

多武峯ヨリ龍門ハ越ス道ニアリ
芝小文ニハ宗ふ中ぢふ　ふトアリ
曠野ニ上ふトアリ

真野雄琴ハ近江地名

白魚　手紙ニ寸ト漬ハ誤リ甲子紀行ノ序ニ見エタリ

東中ぢ恋ぢの恋ぢ　、
腦峠
雲雀ぢ麦ぢ中ぢ恋ぢ峠の形　、
新ぢ恋ぢ同一ぢ恋ぢ屋根の恋　丈芝
支考俳別
杉風の恋ぢ　恋ぢの葉ぢ色　、
芝野雄琴雲雀ぢ恋ぢ　煙ぢ形　、
薄ぢ恋ぢ白魚ぢ恋ぢ　ぬ恋　菊
ぢ中ぢの恋ぢ　恋ぢ魚ぢ　一寸（イツスン）　、
恋ぢ魚ぢ　煙あぢて　根ぢれ　、
親子漬
恋ぢ魚ぢ中　黒恋ぢ国ぢあ　法の網　、

伊達衣二前書如此アリ曠野
ニハ留別ノ部ニアリ

蜆

獺魚を祭　孟春ノ月ニアリ

春駒

海苔

常陸下向ニ江戸を出る前
おくりの人ふ
船のるとき魚おくるあきうど
深川ふかのきて
きくつきて浅ふひとをくる雪の朝　き角
白魚や海苔ハ下部の買ものを
一升ハこのくまき海よりとゝ切の船
膳所へ行人ふ雪ーき
獺のまつりすんで京ゝ淀田の奥　翁
きさらーー里の屋ふきはつぬ春の弱
老懶
塚よりそのうきハ老ぬ春ゝ

十九

西雲嶺ふる夕の裏へやト
九ハ初春第三ヤ

二月

おくりへやふ留り給ーー海苔の砂
行水や何のかとまる海苔の味　き角
黒海苔ハ重海苔とふ岩ふ
降ぬきれて重ぬ日ーー雪れて
出物とまるきうきぬ
春ぬーーとまり何人き
海苔の名やたうちんふ雪と墨　丈芝
二月十七日和泉山を出ぬて
裸ふハきまるきぬ和のあるーー葉　翁
きぬきぬ和やは壮の蹴を枕ぬて　嵐雪
二月ぬとまるき長橋ノ刺鍵ーき
鼎門ニ入を賀き

初午 裏若葉ニ其角カ俳アリ

釈奠 十ノ丁日前書ニ釈菜トアリ釈奠ニ同シ

彼岸

踊念佛 京御影堂ニ鸞中ノ修行

さつき午ゆ松のそよ〳〵天竺葵　菊

初午の清子達ゆ祝新しい

いの字とゆうつ初て和尚山　生角

雪ゆうつ寺ぬく懐の袋の秋　、

寺ふひのん菩提の樹と蔚日の風　菊

授記品無量義経

墨〳〵の物〳〵ものんの少日ゆけ　生角

我等今日関仏寺教勅表

踊躍スト続編〳〵まつて

う寺いら急仏をうの柄抄寺　嵐童

清水聊金

朧月 孤松ニ掛ケトアリ

鳳巾

辛崎の松ゆ花ゆうつ微ゆて　菊

おゆ絞ゆふ松墨ゆ月新風　生角

中川ゆうつ巡てゆ松月夜　嵐童

ゆ〳〵きよ雪の竹ゆの微月　去来

鮮ゆまゆ夏ぬ松〳〵ゆ微ゆ　、

清ゆうゆ松のの〳〵ゆ

微月一ゆ〳〵清ゆ和のをこの松　、

別角曾所ゆうゆ〳〵ゆ

ゆを放つ中ゆ歳ゆう鶯ゆ月　、

大原や堤の岸葉ゆ松絞月　丈学

の清〳〵ゆ江戸をゆれぬ比中　生角

支考ゆ寺絞の心〳〵岩市ゆ

出代

白川の関を越えて世のうき
糸ほそくなる人を恨ふかみ世のうき　嵐雪
坂足の塵を踏へたる
世を捨て新潟を尋ねちめ世の社あり
塔二暫別
春雪を引こそ忘れ申
行脚雄然へ中絶る
末の枝をうきこの忘れ申
芦文殊
蕗の花の忘れ物の
哉や　幼ナ　あ絶るの春　丈芝
出代や　その門の雅長社市　嵐雪

新能　七月ヨリ十三日ヨリ夜々勤

七月ヨリ夜十三日夜修行ヨリ

水取　甲子紀行ニ水取ヤ水ト有小文庫ニ水ヨリ句選水鳥ニ誤ル古集ニテ水ト有異本ニ絶トヤリ

涅槃會

南都ヤあるこの雨
鼎ヤ新の社あるこの雨　其角
二月堂
水取ヤ　水取りの修の堂社寺　菊
伊勢ヤ勢ヤ
神垣ヤ社をこの寺を移さん像
仏前ヤ大咽ヤ入滅　寂ヤ伝
ちぬ　ちぬ　ちぬ　衆生の
法あ　あ八法　法の社形の
仏　ちぬ　ちぬ　ちぬの新ヤ自然の邦　其角
不生不滅の心を
法堂の軒を　さ　を移さん像

西行忌

貝寄風 住吉浦ニテ十九日ノ風ヲ云

文州法師元禄十七年二月廿四日寂

二月十五日ニ来迎

西行の死出路を拾のたもとかな　一

名石ハ鶯のうち

貝よせる風の手ゝ　ちかの浦　菊

文芸を笑ふ

元十年の知ハ三度の昭和行年

昭ハ五年の春を惜ふ

形名鈴をゝ法一日を而て来

しるし法を語り侍るの

ふき名ゆ春れをゝの生別　玄来

二九の園を尋て侍りて

うゝのふ法の美り浦の春　菊

仲春雑

文臺裏書ニ元禄二年仲春トアリ

花待

初櫻 小文庫ニ咲ゝそめトアリ泊船ニ最中ノトアリ

龍樹菩薩の禪陀伽王ハ第七

貪欲をまぬかれ　ものゝふたゝびハ

有ノ瘡近ク猛煙ニ始ト雖悦ト後増苦ノ

ゝ

対ふ縁を

厚陰の以ゆる対浮一法の形　生角

茅をまつ日数ふよりも　君この邦　玄来

伊賀上野某寺初會

初ゝ打ゝ　ふ事ふゝきの日あり　菊

咲ゝそめ　桃の中より初ゝ　ゝ

顔ふ以ぬ　蕾ゝ出ゝ　櫻

森財ふ　ふまゝ　ん自ゝ初　櫻　生角

西行の細をゝ　歩の縁を

紅梅

接穂

種蒔

種芋　已光ニきのうみトアり　泊船ニきうをトアり

蘇花

菜花

新年詠ものしる人ハ打ふ出ぬとよれ
仮名序ニ引るふ歌ぬ中

紅梅や見ぬ恋ぬくる玉ぬ有ぬ　菊

接穂のつまゝ不や山屋敷　〃

見たきものぬ紅葉より接穂ぬ　嵐雪

あの接穂ぬ物ぬ出ふ事ぬ庵幸子　菊

種芋や花のさかりふ貴ぬ行ぬ　〃

よく見ぬ恋ハ無ぬ接ぬ物ぬ　〃

冬行

菜畑ぬ出ぬ新ぬ恋ぬ出ぬ　〃

吾子七歳

狗脊

葎若葉　義経門八ノ吟ノ再案ニ中

荻若葉

雉子

菜の花や坊ぬ戻ぬく果ハ寂寥　嵐雪

狗脊の葉ふ探ぬ見ぬ恋の形　〃

ハ節ふのぬまれぬ茅舎の画結

葎ぬ人ぬ見ぬ結尚舎

ぬの〻名ぬ先ぬふ荻の見の葉　〃

雪下ぬ中ぬ紙を結る

芭蕉ぬ見ぬ出ぬ荻の二葉ハ　〃

名不ハ敷のうち

焼ぬ人ぬ帰ぬ一ぬ人ぬ　〃

雪ぬ

父母の志ぬ出ぬ一ぬの夢　〃

勸進帳ニ山居ト題ス

雲みだれふく中の松ゝ や紅葉の雪
晴ぬ山ゝ峠ハ紅葉ゆ　きゝの雪
人うゝ　紅葉をゝの　ゝ　太の古名　生南
雪はらゝ　き　紅葉の　紅葉の　距の　ゝ
南田川　ゝ
あ雲ゝ　ゝ　の　紅葉　ゝ　の雪
市川　ゝ　牛　遥景
一子　九　義　名　つ　ゝ
遠紅の父　ゝ　や　紅の　ゝ
世の中　何　ゝ　の　紅　ゝ
流雲　ゝ　ゝ　紅の　ゝ　玄来
紅の　ゝ　ゝ　の　ゝ

歸鴈　寛文六年宗房廿歳時ノ吟ト云

燕

笈日記ニ伊勢ノ部ニ補辺ト

亟横

何の禁ぞ　の　や　移ち　ゝ　紅の　ゝ　丈子
遠世の時
雲ゝ　帰つ　友の　ゝ　の　活子　菊
第　根　ゝ
帰る　笑　荘　載る　勢（キホヒ）　寺　利　嵐雪
帰　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　玄来
帰　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　丈子
燕　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　菊

補部

雲ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　燕

隋子この〻亦山伏ふ山伏をめうの山の塔〻てを多をこの〻去入日の月　丸角

法面の切を市一たる墓このめ

傘ふ樹このそうをぬ世伏をえん

夕雲の関吹去ゆるを多をこの野

墓の原〻岡〻や傍ものそうり　丈芽

隋尾の伏家俊格〻新世市を

古巣去〻あ〻を世ゆ〻へき隋の野　菊

雲の秋や巣を出去〻ゆ〻を多

去〻めゆ〻去〻契傍この去を嵐の巣

〻を去あ〻しやう〻を〻ふん

岩ゆや あ〻の傍ゆの巣のこの月　丸角

鳥巣

諸集夏冬〻部ニ出ス誤〻

雀子

虻栗ニ変〻ゆ〻と〻

柳鮫

蝶

春の水〻林の末野芽や柳鮫　嵐雪

蓬ゆ西撰

去経市一の郷野〻ん〻ふ山堀　菊

堀の花去〻の雲毋野ゆ彩月　〻

堀の野野芽岐去ゆる堀の中経　〻

野〻〻わの夏ゆ〻ん野ゆる松堀　〻

堀〻ふ中狩を経巡原毋　去角

葉屑ゆ巣を見去〻一山堀外　〻

経ふ〻堀野〻何を去る車去　〻

春ニ車馬堂一

夕日の毋野毋ゆ花去〻ふ〻野　〻

蛙

貞享三年ノ吟ナリ正風ノ姿情コレヨリ定リ玉フカ

自得

蛙を猫の子猫を飛る心かな　い

河鎮き人ふかくなる故蛙哉　嵐雪

古池や蛙とびこむ水の音　菊

きりぎすと蛙なくなり江の石　弦歩　生角

ちんきりと蛙なくなる波の音　い

なつふしや蛙　蟬の鳴　嵐雪

築地入り暑物岸のつくつくし　去来

田の畦や蛙を背負て鳴蛙　い

一畦の苗を喜ぶ蛙哉　い

梅を寺ふ蛙

杉風を杖越てきく蛙の聲　丈芝

田螺

句集死ぬふに作

三月

上巳

曲水

蛙なりけるのぬちのてをぬる蛙哉　い

芳野を下る時

飯貝や面をうつすてをる田螺きく　菊

男男をきちんとなる田螺売を

水底ふかめて結ぶ氷腰をむさ

るる蛙のいとをあくへたりて

入ぬる鰐を死ぬる田螺哉　青　丈芝

糸ぶ金の杉を絶の心を

神風の中をとハ御門の柳　去来

三月や三の市きの栗ひ来　丈芝

極のりや兼ハ美人ハ知まる　嵐雪

曲水や花きのうる君まつた　生角

真の細道に移るの月先まづ名
みつゝ行るゝに八人ふ續
りて移ればふ野ふうつゝト
アリ

雉

(丙)女ゝ恋ゆゝト前書アリ

草餅 元禄六年ノ桃の実ニアリ

鶏合

なるうとゝ
世わゝ世ゝ我酒のん豚ゝ鄙、
深ゝ鄙ゝ小家ゝの野、家重
石女の家ふの深くゝあゝ生ある、
拍掌や下ふ雪ふ雪る去来の鄙
芋尾ふ拍掌あゝ八ふ角
家重あゝ
あのゝ拍ゝゝゝ芋の餅 菊
芋の実ゝ深ゝん芋の実 家重
咲れハふ山中移 合 生角
縁ふをひゝゝ実のゝゝ水、
重三

潮干

海蜊カ

潮干ト前書アリ

青精飯　寒食ニ楊柳ノ葉ヲ採染テ飯食之陽気ヲ多ク

峯入

櫻

笈日記ニ吉主蟬吟公の尾おゝまトアリ蟬吟子之舎外探丸名良長家督ヲ継リ

青柳の泥ふきとれば潮干かな　菊

汐干

見渡せば白波の末弥遠松　雪角

水芭の多き書ん葉のそれ　嵐雪

そり帆の浦伝ふ多き沙干哉　去来

椶柳民間（コマヤカ）漕ぐ菜めし　嵐雪

峯いりや一里ばかり小山伏　菊

水口みて廿年を経て

姥人ゝ遊

命ふるに中ふ活る櫻の形

採丸子別吟

さまゝの年地ちひ出る櫻哉

集尾琴鶴の巣トアリ異本鶴トアリ花の葉ヲ共の初葉ニ

飄二木のそゝふトアリ三炸紙共句集ニ木のそゝハトアルハ書損カ

紅地無垢

ちりぬるを櫻見ぬうち桜哉

春ちかハ野ちんちの色ちゝ蕾

山京

鶯の巣ゝ嵐の形ちゝの形

屋ちゝ汐ゝ色ニ年ハ蕾ちゝ

木のそゝ汁ゝ鮮ゝ櫻の形

菜平　別吟

年ちゝ春ちゝ色ちゝ花ちゝ色の蕾

春の秋ハちゝふ吟ゝ仕業ゝ

猿のちる汐屋ちゝ櫻の形　宝角

立吟清水書ゝ

鐘のけてまのはさきのうすき櫻哉、
妙蓮坊にて櫻を見て
ふかあるみ櫻さく山ほとけ哉、
大悲心院の前を通り侍りて
淀川の雪をみん待りて
打うち敷生像盗あり
あたあるとて前ふ五戒のまゝ寺、
仁和寺
櫻法師の中うち未ありて櫻葉、
雨後
櫻ちるやうにふ五日ハわかせ寺、
唐土思ふ吸ふ櫻この郡、

句兄弟二貞室ヲ吟ト番ヲ

山櫻 延宝七年上野ノ吟ス

異本ニハ空ヤトアリサルト成
畑泊船ニモ詠書ナシ附會ニヤ

陸奥衛浮世の北ハ加州白泰納トアリ

見ハくるとゝまるとゝの櫻この郡、
翁さくらを見て
笠先うち見て櫻ちるん茨さくら丈ヶ
雨降寺ハ
ゆ屋根の屋打うち降らん山櫻菊
初瀬さくら人ゝ見ん方
うの宮寺ある人や初瀬の山さくら、
中のさくら風ふくさくら先ふちら、
野さくらの先寺ふ山さくら、
上醍醐
ゆうさくゆゆゆ俗ちちん寺櫻、
句宮へのふうのふう

うゝ雪ゝ浮世の小の山さくら　丶
五とり社車ふ流水や屋敷　櫻　李角
山櫻競ふ所ゝき俗あるん　丶

越東叡山二句

小坊主や　杉ゝ一つゝさて山櫻　丶
八ゝ重の山のさゝゝや一ゝ陣　丶

芳野山ふゝゝ

明星や　さゝゝ雲めぬ山の陣　丶
雪ゝきゝゝ牡　きゝゝ櫻ゝ　丶

牧光山入撰

ふ雲くさゝ紀風　杉ゝ山櫻　嵐雪
雪の滝の岩ゝ入や山さゝゝ　丈芝

櫻狩　笈の小文討書アリ

糸櫻

家櫻

八重櫻

櫻　杉　李ゝ　やゝゝ五里山里　菊
小ゝ　ゝ　ゝ里の杉ゝ　ふ櫻ゝ　丶
さゝゝ杉ゝふ八日ふ　ふ　李角
ゝの雪ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　菊
雪ゝ雪ゝの芝ふ雪ふ雪ゝ
分ゝ雪ゝ杉る緑ふ雪ゝ　櫻　李角
櫻川ゝ神　ふゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ神の
雪ゝ雪ゝの雪ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
（ヒサキ）
緑末ゝ雪ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　櫻　嵐雪
雪　杉　ゝ　雪ゝ　ゝ　ゝ　櫻　去来
雪ゝ八ゝ雪ゝ雪ゝ　ふ　ふ　櫻　嵐雪
高良七重七雪仏　重八重ゝゝ　菊

遅櫻

花

延宝七年吟也

天和ノ吟ナリ

西華集ニ餞別ト云

思ふ事もなくて
万日の人ぞ知りける庭桜　生角
紅葉せしもうすき春望るゆ新菊
憂方ニ知ル聖ニ会ハ賢ニ神
新うき浮世我ぞ志ゆく色思
櫻櫻ゆ出るうき世の花うき雪
世ナリ世の花の念仏中春
あるべ人の山ゆ山ゆ
種の木ぞ花ゆ山ゆ山ゆ
花ぞ七日新見んるふ春ゆ
物背自得
花ゆ比ふ俗ゆ友ゆ免

思ふ門事の花ゆ四生天の
葉花ゆ花ゆ八ゆ山ゆ場ゆ
ある思ふ下ゆ原ゆ西昭
俗世の浮世ゆ新ゆ頃山
月の山ゆ俗ゆ花の表桜
新の林ゆ桜ゆ桜ゆ
あるれ有利
観音の蓮花ゆ月ゆ雲
古世ゆ花の格出の格ゆ
新門二句
新門の志ゆ戸の山産ふ
昭の山ふ俗ゆ滝の花

芳野紀行三ヶ出後ヶ再案二十

笈の小文ニ桜匂ヒシ小文庫ニ
とあり未詳
句撰ニ花の色ニ誤ル

[illegible]

[illegible]

笈の小文ニハ伊勢山田ト前書
アリ笈日記ニ詞書アリ一本ニ
花ヒトアクミ外ミナ花ヒラ
トアリ

[illegible]

何の木とも名のるさくら白ひとめ

糸ニ門人

[illegible]

続虚栗ニアリ嵐の外の橋再案ニヤ
裏若葉ニ其角ガ詞書アリ
琴ト太鼓ト筆トノ讃ノ其句ナリ

鸛の巣も見らるゝ花の葉越かな　翁

琴引僕

ちる花や鳥も驚く琴の塵

露沾公にて

西行の庵もあらん花の庭

あすハ檜とかや谷の老木のいへる事あり
昨日ハ夢と過て明日ハいまだ来らず
只生前一樽の楽の外に明日は
明日はといひくらして
終に賢者のそしりを
うけぬ

初案ハ日ハ花ニ暮テさびしや翌檜トアリ

さびしさや花のあたりの翌なろう

泊船ニ宗無亭トアリ

瓢竹庵ニ膝をいれて旅の思ひ
いと安かりければ

花を宿にはじめ終りや二十日ほど

瓢竹庵より旅立侍るとて

此ほどを花に礼いふ別れ哉

路草宰

紙衣のぬるともをらん雨の花

伊賀国花垣の庄ハそのかみ奈良
の八重桜の料に附られけると
云伝へ侍れば

一里ハみな花守の子孫かや

藤堂高木子にて

土手の松葉や木陰き敢なきり　翁

洒落堂記

四方より蛙鳴くなり鳴の池、

蛙のこの年　初なりこのなる　丸　瓦、

桜ちる　森ふりぬるきぬ　春水

森の春の　ちる

蛙ふる森の　ちるなり　巌の巣、

垣雪　水雪　雪　悔

地ふる　雪　根ふる　蛙の　雪　蛙、

弧石ふる　ちるくぶ　行を送る

雪　初ふる　碑

岩山　碑の　蛙　ふる　の　水、

蛙の山二所の　ふる　大　雪　岡、

支考ふる　境　へ　を送る

洒落　桜　根　ふる　蛙ふる　五　蛙　一　具、

尾張の　人　ふる　洒落　一　行　木曽

の稲沢　蛙　一　種　ふる　ふる　我今

ふる　ふる

秋角て　蛙　洒落　ふる　二升　持、

芋屋

蛙の　雪　縛　上　空　この　洒　叶、の、

俳　分　俳別

鶯の　毛　ふる　長　中　蛙の　雪、

惜花不掛地

天和ノ吟

我僧義もひろう新緑ゆゑ　其角

白鳥寺の傳〻連歌のこゝろを

等閑しく

義ろう酒傳ふ俤ん　堀義

清き〻清水ゆ遊ぶ

車ゆく義ろんを見やる　東山

義ろを義ろ人の跡ろ　松ん人を推

義ろ打ち人の跡ろあ俤のん

義ろ新ゆの義ろ　支ハ義のろけり

ゆ新義ろ　ゆ行ろ支婚葉

義ろゆれハ接寂ゆる春の山

地讃ゆ義のおふハ松ゆの刈

炭俵ニ無好ルトアリ句集ニ無好の二作トリ

大仏　徐ろ俤ん義ゆの雪

神力品ニ現大神力

法の義ろ和ゆ義を義〻言

義ろ義ゆ　路俤を入ろ足の印

義雪のろ〻義ん新の形

あ〻知ゆ仏上ある義の山　嵐雪

義ゆ風の俤〻義〻ゆ酒社俤

ゆ雪の波を車ゆ　義の光

新　義ろ義ろ義ゆ和山　嵐

無好ゆ和一俤踐ゆ義ろう

大和路の東御ゆ義〻風車

義風ゆのろ雪〻行ゆ一俤ハ義

[illegible]
[illegible]大井川八川越あり左右
[illegible]しかれども何ゝ咎
[illegible]坂八宮のあるあり[illegible]の雲　嵐雪

[illegible]子中陰田向
[illegible]筋八[illegible]の師[illegible]子八陰
[illegible]の盆子二十年来八面ふとり
年を[illegible]して他の面を出す
[illegible]一来れふるんで半分を
[illegible]坐れをゝめ[illegible]ハ
[illegible]夫[illegible]大然[illegible]へ
[illegible]ゝ

夢[illegible]ぬ白[illegible]跡[illegible]の雲
[illegible]く鞍[illegible]ある舌[illegible]先
遥遥酷暑之間歩〳〵[illegible]続
[illegible]の夢時分を[illegible]
原の[illegible]を通[illegible]物後の[illegible]
[illegible]
山[illegible]
[illegible]を時[illegible]
砌の[illegible]
[illegible]
[illegible]井の[illegible]人[illegible]

合志なる旅うの条合志り
富士を見ぬ野人なあらん芦の山　嵐雪
小町塚
我為ゝ国ゝ鼻ゝ形き花の色　〃
塚ゝ今ゝ昭入帝り志賀の浦　玄来
南都の般若寺ゝ
寒ゝ鶏ゝ鳴ゝる芦や般若の砌の留　〃
寒ゝ鶏ゝ鳴ゝ用ゝこの不ゝ寒ゝ寒ゝ花　〃
芦ゝ中ゝ白ゝきゝこゝ鶴ゝ鳴ゝき寒ゝ　〃
ゝの山ゝ寒ゝ山ゝ寒ゝ寒ゝ芦ゝ芦ゝ　〃

小袖干ゝ寒ゝ屋ゝ寒ゝつゝ芦ゝ芦の花　〃
寒ゝ鶏ゝ山ゝ八あの山ゝ寒ゝ芦ゝ寒ゝ　〃
山源ゝ分ゝ入ゝ
木の葉ゝ社天物ゝ今ゝ花の友　〃
四上の石へ花ゝ石ゝ寒ゝ移ゝ寒ゝ
海ゝ寒ゝん ゝ 四ゝ寒ゝ寒ゝ芦の雪　〃
峡ゝ寒ゝ深ゝ芦の人や神ゝ寒ゝ雪　〃
立枯の跡ゝ多ゝ芦の中　〃
跡ゝ寒ゝ芦ゝ寒ゝ寒ゝ寒ゝ寒ゝ寒の色　丈芦
角入ゝ人ゝ寒ゝ芦ゝ花の友　〃
芦ゝ寒ゝ寒ゝ四ゝ寒ゝ芦ゝ寒ゝ水の庵　〃
白ゝ寒ゝ寒ゝ月ゝ秋ゝ寒ゝ芦の枯　〃

花見

更ふ劉伶ら鋤を儀〳〵異

〳〵

跡弘めん先の〳〵花のうゑ〳〵者り　丈芳

花ちるや聖き食ある岩の宮　〃

水畫うゑ陸や花の人出入　〃

所屋ハ岩〳〵のあ〳〵りもむ〳〵級　〃

ちるものハ志ハ志ハ扇け紅の花　〃

木陰〳〵きや枝朱をさの色花の布　〃

笠和〳〵舞を〳〵きり〳〵花の友　〃

小夢の志ゆつぬ〳〵や花の下　〃

夕暮や花砂波ふ志あ〳〵清〳〵　〃

軽ある奴花見る志淋う野の清海　花

京清ら花見の雪ハ七ら粥　〃

緩通ら陸奥う越く時

笠ふ〳〵ゆふ志ふ花見〳〵ふ者よ　〃

云庫ふ〳〵ら源川の橋金ふ行

花見んみ〳〵志屋て　柳原　〃

ゆ雪の花見うまう行〳〵ふ

人〳〵幕ら志さ〳〵き物の当ふ

う志の春ゆ〳〵りまあ〳〵りふ中る

ゆ〳〵ハ〳〵の松の叶を志〳〵

四つ五笠の〳〵ら緩ハ女ん心う柳　〃

緩屋妻奴の緩をい〳〵の〳〵る

う〳〵心ふ〳〵ら志ら清を弱〳〵

元集頭書ニ桜の花ちりてあられありせまき入ー水の井ちらせぬトアリ

傀儡の鼓うつなる花見かな　其角

雛司古今

山里は人来て何の花見かな　、

屋形舟花見女中出でて行く　、

あら人のあさましくも花見かな　去来

花見にもたゝぬ里の茶の木かな　、

何事ぞ花見る人の長刀　、

うらやましき花見の留守居哉　丈草

薬摘の売り花見かな　、

病中

山の端は花見にこりや(?)の音　、

海棠の花

月花

月花句曠野ノ例ニ倣テ花ノ条ニ出ス

笈日記ニ三聖人ノ画アリ

菜畠や花見の中を渡り鳥　、

酒盛る人の蹴(?)り

月花もなくて酒のむ独り哉　翁

守武宗鑑貞徳画像

三翁は風雅の天工をうけ得て

心匠を万歳に伝ふ此かけに遊

ふもの誰か此道のさかんや

月花の是やまことのあるじ達　、

続芭蕉翁

月花や洛陽の寺社のこりなく　其角

つき花のさかりはかりや中出て(?)　嵐雪

助給ふ山吉集を賀して

桃

海棠

自然やまとまくらの人家里の山　お芳

伏見西岸寺

我家の伏見の桃孔雀さく　菊

炊へハ餅ふるそ俗さの花　〃

尚白と酒義へ下る

たゝ一枝桃うゑるる末惜れ　〃

あ年ふの木ふる桃志の弱の彩　生角

花さくふ桃や孔雀岐の俗さう　〃

葉ふ葉うゑ市一人彩や桃の花　〃

桃の〃孔桃の中一俗や等拾俗　嵐雪

海棠の花孔うゑ中桃自　其角

重撰

躑躅

句集紫のトアり

棣棠　ちるや意のもり

祐山や虹吐あるる少清し　菊

星の体ひとゝ拾居ハ獨志

この年ゝ

つし活ゝ生活ハ干鯉さく女　〃

小多居ハ紫の神うゝ清し山　生角

旦夕の増居ゝ山る激弱の孔　〃

咲たゝ〃清うふるぬやつし山　丈芝

さしのゝ〃恵へ清しの月武　〃

西河

弓絃くゝ山伏ちゝの滝の岩　菊

重撰

山伏や字治の焼炉孔多ゝ山　〃

藤

山伏中 [illegible]

立春退居

山ふきのうつりて黄なる葉の形　嵐雪

[illegible]

[illegible]

大和行幸の時舟渡御[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白菊を[illegible]

細書略

茶摘

櫻麻

菫

[illegible]

第五

山[illegible]

[illegible]

藪の根ゆあらそひ出る菜摘頃　玄来

百姓[illegible]

木白[illegible]

細うち[illegible]

大津[illegible]

山[illegible]

作[illegible]

[illegible]

鳥帰

山雀の[illegible]

広瀬止観一月の羅不能得鳥　去来

得[illegible]羅唯是一月は[illegible]の心を

[illegible]　其角

鳥入雲

蛍

孫[illegible]の[illegible]中一[illegible]白の[illegible]　菊

入[illegible]の[illegible]

[illegible]川の[illegible]中の[illegible]　丈芝

春暮　室の八島ニテノ縁ヲ[illegible]

久ニテノ再案ニヤ　春タケト暮春トカ作ニヨルヘシ

行春

行春[illegible]　菊

詞書細道ニアリ

[illegible]別

[illegible]中[illegible]魚の目を　渡

[illegible]水鳥

三月盡

雑

行春を[illegible]の人を[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]不[illegible]の春の[illegible]　丈芝

[illegible]

[illegible]の[illegible]　菊

布袋画讃

[illegible]の[illegible]中[illegible]袋の中[illegible]自[illegible]

大堰川遊覧

春和今[illegible]新中[illegible]雲　去来

四月

青簾

更衣　吉野ヨリ出テ奈良旅中吟ヲ小文庫ニセヨトホ屋ヲ[illegible]ト[illegible]

白重　裏表白ノ平絹　氣候冷ナル時　重テ着ス

夏之部

[illegible]　菊

[illegible]　其角

[illegible]　嵐雪

[illegible]　菊

[illegible]　其角

[illegible]　嵐雪

[illegible]

袷

夏衣　野さらし紀行ニアリ

夏羽織

夏日

大海の新そばの花の白き行の水　其角

一ふくの行水あるや墨木賣　〃

揚屋の門の柳の下行の郷　嵐雪

帰庵

夏山の緑のいとゝ風さそふつゝ　蕉

老の身の見をかはしく夏衣　嵐雪

見のれの中笑ふさけて夏羽織　蕉

才子の中也一言初織も法華の形　其角

寺住の夏の日の長の日の毎ゝ　蕉

江の面

笑の口中さかて蚊の柏もり　嵐雪

夏の日の中ゝ蚊の日の柏もり　〃

夏夜

夏の月の句ト何レカ再案ニヤ

短夜

立元集ニ夏の夜を云ヒ恨ミト
アリ猿蓑ニシタカフ

曲案寺の中ゝ

笑の新中ゝ　蕉

あつの新中ゝ　〃

ゝゝ新中の新の再ゝ　〃

岩蕉寺新送墨

短新中　洋〃へまてふ墨の見　其角

ゝゝ　〃

ゝ後ゝ　〃

みゝ新ゝ　〃

短新中新の中ゝ　〃

若蕉庵の新の夢の網金の夢　〃

庵の新ゝ　嵐雪

夏月

延宝七年向田ニアリ一本ニ赤坂ノトアリ

夏雨

夏山

四十五

夏海

吉野　松島ノ吟八翁

捨モフ処すり

夏川

夏野

三州紙ニ初案夏馬ノ五字トアリ句撰枯野ニ誤

陸奥衛ニ那須の黒羽翁文

アリ

夏坐敷

灌佛 三卅帝ニ再案トアリ 續狩裝泊船涅槃會トアリ未詳

[illegible]

[illegible]人ハ[illegible]

林野等の[illegible]

山[illegible]あき[illegible]

灌佛や[illegible]の[illegible]

[illegible]

灌佛の[illegible]

上行寺 二句

灌仏や[illegible]寺の[illegible]角

灌佛や[illegible]

佛[illegible]人[illegible]の[illegible]

[illegible]

夏籠

夏書

扇

[illegible]佛や[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

破扇の[illegible]

紙[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

這出るもの西行のえをかく
この中に待る城後鳥羽の御のこと
みなそこなる名のきこえ待る故に
しらき
壽ゑ扇えらきん松の一の巻　岩雪
繪巻えらし後白の像
巻の中をかしてふうふえ
山里ふえもきえてえもの墨深
の袖しぐ山ふう
團扇えてあるえ人のうしろつき　高
紙子團扇の百姓みをひうの形　を角
うちえの風情をふる團扇如
ハ

團扇　うちはらて者中つき又うしろ向ナト
諸集ニアリ

紙帳

蚊帳

汗

元壽法師分まうり市ゑ
巻の中を投出したる團扇ゑ　丈巻
中のうしろ坂屋まうたり
板えや移ん武士風を入る者　を角
小童淵ゑ見て
霧面ゑ木下の雪武士姿　岩雪
旭ええ武士のうちや坂のまえ　丈巻
書巻を坂屋みる和ゑ八橋大原　を角
裏面侍ハ人
汗ゑのえ入り坂屋の内　丈巻
汗水やう坂えの後山松　高
光明寺みえ

汗拭

イニホ杉よりみトり

汗襦胖

あきの夕くれ衣ふるとん行方哉　丶

京竹の夕くれ人をくるしうす

帯りたり送りの雪一ツ

市立ぬ一ふの雪十結る

雪の杉いのうりかたん汗拭ひ　雪角

雑見雪

汗ぬぐひ小杉ら印を汗の風　嵐雪

ぎん志ゆうの柳仲ときを汗拭　丶

竹婦人ハ志ゆを抱よけ雪

あ丶人や移丶ん涼丶を

一人移んふを

汗小杉ハ風吉丶丶仲襦俳　丶

牡丹

勢田三歌仙笈日記ニハ牡丹志へ〻て造出さよりト

牡丹ニ杜鵑画ヨリ

尾張ヨリ東武ヨリ下ル時

牡丹葉浮〻〻ヶ峰の名残哉　荷

矩一概俳新蓮自画讃

ゆ〻しの夏ハ牡丹の葉の裏　丶

いろ〻への高貴の旅の不ふ拭　雪角

紙ぬ紅を

志ゆ丈の結ふ鏡ふ浮る牡丹ハ　丶

河内新心寺

梅の縫ぬ一ツ不ふ丸　丶

雨志張志ふ

八ツをう俳ふ笑ふ牡丹ハ　丶

古屋ヨリ

牡丹ヨリ　嵐雪

燕子花

玉簾すきもの玉紙の牡丹うれ　、
大坂市ゆあるの許まで
牡丹活もも拍の動きつの水　菊
山崎宗鑑屋敷ゆ近衛殿の
宗鑑ゆきもうしをもとこつき
法をもとしまし遊しをもとをもひ
ものこ心の中ゆふ
弓うくきもうきもの拍ん牡丹　、
四位侍知足寺庵ゆ
牡丹我ゆ豊向のはもひあり　、
淺間寺ゆ遊ふ
水漬ゆ用ゆ不ゆ中ゆつきもつきも　牛角

句兄弟ニ信徒カ句ト番ウ

罌粟

牡丹ゆ琴ゆ人ゆ地ゆ中ゆ不ゆ中ゆ　、
簾ゆ中ゆ簾ゆ　淺雪宗　撫ゆ中ゆつきもつきも　、
淺深の錦を川ゆ中ゆつきもつきも　家義士を悔也
高田弥ふ有ゆ俗ゆきもふ　、
中ゆき淋ゆ人ゆ者ゆ人ゆ牡丹　嵐雪
新ゆの紫ゆ中ゆもの中ゆもの中ゆ　玄東
ゆ杯法ゆ人ゆ跳ゆ中ゆ　牡丹　文子
白芥ゆ中ゆ法ゆ中ゆ簾ゆ　菊
　　牡丹園
白ゆ中ゆ小ゆ相ゆ蛙ゆ中ゆ　、
涙　廣

茨小文二須ヒの文字

葵

海士の釣舟まつ見らるゝや茨子の花　生角

茨り深ハ風なきの夕ハ茨子の花　生角

舟葵の一渚咲まさる市の花　玄来

青葉や馬繋ぎ置く茨子　如茅

元禄四年　寺

葵の花の山路の風　嵐雪

元禄七年　孫七郎

葵の紅を市に売て

孫うるり葵山ゆ〻白ひの花　玄来

紅花へ紅傍書ハ〻

澤潟の花うくゝへの紅子の花　嵐雪

山茱萸の花のこゝゝや重〻不二庵

澤潟

茱萸

茱萸三種アリ皆〻五月ニ熟ス

荊

橘京庵ハまを見る時人ゝ

まゝこのうの文葉ハ逢きれる

彩も紅物の情ゝ古ゝ人ゝ

折ふ一の口ゝ古ゝ

まりしをふくまのひゝ

ふゝ先ハ一接をいひふ〻し

ぬるハ此のゝ高枕のつき

ふゝ四紅あゝ覚ゝ結て

ゝ中ふ高ゝあり荊の花

妻驕傳文下り略

荊の花紅きゝ〻ゝ旅ゝ

紅の山紅の浦海ふいゝ紅ふ入ゝ

蛇苺

草雜

夏草

麥

数生石
石の多和多子赤く霞暑し　丶
素歩石
多の戸ハ子ハ子ハ咲子の子多の子　生角
川舟供
多子子稀子　背牌を子詠へ子　丶
名不ハ詩のうち
林中須廣寺の中や　林子麦ろ和　菊
逸素門
ゆ子子子　橋麦咲子ん子　松　丶
甲斐中子
移豹の麦子　ゆ子　麦中子　菜　丶

陸奥衙泊船にちのふつうをアリ

今能見堂下書ク

若葉

笈日記泊船に青葉してトアリ

麦の穂中 駿州深瀬の時雨庵

五月十日武府を出て帰るとて

越ゆ人々川崎まで送て来る

鮎ふの匂をいふるこの人

麦の穂をたてつらぬいふこの船

紙行李麦つく俤を幸にきる風 生角

馬士の唄てくるを聞る麦畑哉

蕪居

此ち絶ん新ち麦ちとあり 嵐雪

ちつ〳〵の紙ち巣ちり麦の紙 去来

招提寺

ちち苔〳〵御用の宗ゆくを和 菊

高久野藏ニハ木の下ちちのちりトアリ初葉十ち

新樹

茂

日光山

あ〳〵ちの青坊ちちちちの日の光 、

年ち〳〵ちの雲の新ちけ 生角

ちちちち〳〵ちの和ちちの朝より 嵐雪

ちのちあふこの山ちち苔ちの 去来

書鮮を干して新樹の青ちに 嵐雪

大坂の堺を 日光御代系動き

ちちちの鹿浸ちる四民何

茶ちの青

藤の霧待 四の青 ちちちち 菊

羅山藪の青ちりや風のちち

蕪毋義

夏木立

木下闇　笈小文ニ須ナ寺ヤトアリ有磯海ニふかり

常盤木落葉　清瀧ヤ波ニ散込青松葉の再案ナリ

[illegible]茂りかな　文角

[illegible]

芽出しより二葉に茂る柳の梓　丈草

夕暮や[illegible]川の音　、

雲岸寺

木啄も庵は破らず夏木立　翁

幻住庵

先たのむ椎の木もあり夏木立　、

須磨

須磨寺やふかぬ笛きく木下闇　、

清瀧や波にちりこむ青松葉　、

[illegible]

若楓

桐花

柚花　嵯峨日記ニカク出小文庫泊船ニ柚の花ニ昔を忍ふニ作ル

盧橘

[illegible]

常磐木の[illegible]　嵐雪

[illegible]若楓　其角

[illegible]

[illegible]若楓　嵐雪

[illegible]桐の花　其角

[illegible]桐の花　去来

落柿舎

柚の花やむかししのばん料理の間　翁

駿河の国に入て

するがぢや花橘も茶の匂ひ　、

[illegible]

椎花 許六カ韻塞ニモカクアリ 続猿蓑ノ旅人ノ椎ノ花ハ書損ナヘシ

藤實 泊船 秋ノ部ニ入ル 諸集 夏ノ部ニ入ル

椹 天和三年 虚栗ニアリ

卯花 句撰ニ櫻ヲ忘レタト誤ル

椎の花ハ心ある似たる木花の様、
関の住素牛大徳の招客を訪
き侍りしに藤しなの紙幅
のこい色きん花ハ京住の業
白雪の
藤の実ハ俗ハ花のあと、
椹ハ花なき様の世捨法、
時大顛和尚
梅を忘れうの花あるを忘れ、
千角ノ母五七ノ遠義
卯の花ハ母なき者なるなり、

筍

竹の子ハ柳の及ばし、
卯の花ハ鈴ノ山の花の様 千角
うの花ハいつもの法師の加茂行、
蕨ハ花うの花ハ花ッ木 蕨雲
伊勢ハ
卯の花ハ海のこのりハ然哭山 去来
卯の花ハ絶句きこん寺の門、
明経の法
卯の花ハ笑招きし和泉山、
小猪の境ハ
うきふハ仲のこゝ者人の采 菊
仲のこゝハ雅き財の陰のきゝ、

海松

寄幻吟長恵

老僧の筆をのぶるこの風　生角

祝発育

筆の法ふ脇の結ぶ法ふ　、　嵐雪

此の子和男の当くまの英しき

仏の子和仏の家社堀よりは　、

仏の子和国ふ子恵太郎　玄来

武士の子社長を学ぶ

筆の時ふ法ふ一方の作　、

金海観遊

海松の子和小沙古風の磯部松　生角

海松子和貝ふる山水を筆ふ子　、

子規

天和三年ノ吟ナリ

泊船集ニ花房ノ作ハ誤ナリ

筆光寺中ふ海松ふ

海松子和の子社ふ法ふ　嵐雪

法ふ吟ん耳ふ法ふ寺の子　、

部ふ平自ふ法ふ　菊

社部ふ法ふ和ふ梅の筆さけり　、

梅和ふの空中社ふ法ふ　、

須磨の磯社ふ法ふ和子規　、

社部法ふ子時ふ　、

部ふ法ふ飛ふ此筆ふ法し　、

嵐見の滝

子ふ法ふ見の滝社ふ法ふ　、

陸奥衛六声や横ゑ笛
竹六横ゑふ声や諸集ニ
声横ゑ笛トアリ治德カ
判ニテ前章ニ定メタヨシ 發日記ニ書通アリ
泊船京ヨリ屋久ヘ出トアリ

ゑちの〳〵一月の末ハ四月六人
形浜の志はせをを義仲殺せ
ハ月ん〳〵いまゝ行くゑ西
ゑ出市ハ先生ハ先生ふとまは
義仲ゑ人の家の家のゑまは 前
形浜ゑ〳〵
ゑ横ゑ〳〵ゑ
不ト一周忌ゑ出市ゑ社行、
鄙ゑ〳〵ゑ 砂弟、
ゑ鈍ゑ横ゑふゑ 水のゑ人、
一ゑの行〳〵横ゑふゑ 社行、
京ゑ京ゑ京ゑの行ゑ行ゑ、

嵯峨記犬竹 發トアリ
發日記泊船行京トアリト
文庫ニ月ゑトアリ

伊達衣寄夏竹ト題アリ

嵯峨ゑ
鄙ゑ大竹ゑ蕉ゑ
社行ゑ〳〵ゑ麦の出ゑ尾ゑ、
行ゑ〳〵ゑ行ゑ五尺の出ゑ竹ゑ、
さゝ竹ゑ書ゑ
ゑゑゑの年 竹行ゑん鄙ゑ、
仙童ゑ行ゑ、
四竹ゑ竹ゑ竹ゑ市の社ゑ、
發屋行、
尺ゑゑ竹ゑ出ゑ〳〵の行ゑ、
ゑ市ゑの竹ゑ行ゑ行ゑ竹ゑ竹ゑ竹、
末ゑ〳〵ゑ筆稿ゑ竹竹 社行、

烏蹟黄の高きまゝにし杜宇
曉の砌面をさゝふや保ゝきまゝ　雲角
不ゝきに一ニの梅の散のこれ
ゆゝしみをきに梅のみちにあきあ
来名ゆゝ
梅の情をゝ
杜鵑人を弛きふ蕗ぬ散れ
卯月十七るあるへの雲ふ
称ゝ中きゝ
新ゝ懐深ゝきゝ
須磨ゝ
杜ゝ雲の縁ふある浦梅れ

宰府を納
不ゝきに雲ゝ越ゆ常り
雲ゝ中あゆふき青ゆる杜鵑
ゆゝの面新きや新き
俤顧
不ゝきにあのつき傘を買せり
母ゝ新
き夢のゝ世待ゝたのゝ赤
夢ゝ寄る母をこのきう新ゝ
ゆ打を自の新ふせん不ゝきに　晨雪
如ゝきに砌ゝ色異ゝつん
伊勢法乗

心ふかく杜鵑のうたてきこえ
侍るを聞て侍りしに郭公
杜宇寺中利休の茶室
時に音を
聞入てとゝ寺の形しるれハ留客
沛成寺の門の内の勅を杜鵑
此とゝ寺紙うり付をゆけ時寺
音て遊美
種の間ハ老郭公きゝめ郭公
ゆゝしきまゝ時や寺後ゝ十五字 玄来
うの寺山の八きゝ寺ゝ義
兄弟の頼ゝ寺中杜宇

涙襟集義士大石良雄ノ
賛 禹八光琳ト云

去歟ゝ寺ゝ亀ゝ寺ゝ多ノ杜宇
新ゝきゝふ一寺ゝ寺山三形
黄寺ゝ中結古刀中ゝきゝ
時ゝ寺ゝ寺ゝ寺ゝ寺ゝ寺石此時
横寺ゝの寺ゝ寺ゝ寺ゝ寺ゝ寺
いの世ゝ耳ゝ寺ゝ寺ゝ寺ゝ寺
鶯ゝ寺ゝ寺ゝ寺ゝ寺ゝ寺
きゝの寺ゝ寺ゝ寺ゝ寺ゝ寺
西山八形ゝ
新変ふきゝ中 田望の子牧
石ゝきゝ時中清水のゝ寺 丈子
ゝ玉きんゝきゝの形の寺ゝ

[illegible]滝より上のわたりの郷、
川越の遠中ふもとや新宮、
菜畑のう[illegible]禁や野風の杜、
杜鵑誰[illegible]さん川也の、
[illegible]一さんの[illegible]、
嘆[illegible]
若草の森入るや藪の郭、
木曽川
[illegible]毎の[illegible]切、
月数の杜ふ[illegible]、
狂乱の[illegible]ふ[illegible]、
遊長[illegible]寺

閑古鳥

等の[illegible]、
[illegible]の森や梅の実や[illegible]、
森[illegible]梅田枝花新宮、
杜[illegible]宰の[illegible]草、
[illegible]、
[illegible]、
栗津野や[illegible]、
山[illegible]京の[illegible]、
うき我[illegible]郭、
[illegible]
風[illegible]の実や[illegible]
[illegible]

行々子

老鶯 別坐敷ニ旅中より聞ゆとあり

鶺鴒

鰹 松原陸奥衙泊船集等鎌倉をとあり類柑子ニ鎌倉ハとあり 本句ハ前書ニ

慈母袁中

俳しらぬ貝ふく俳ふく深古秀 芭蕉
浜ヲのや生しろ中伝を深秀
ゆうゆうゆう生て俳付うゐん古秀 芭蕉
鮭ゆ一の孫ゆて赤をけゆゆ子
四ちひ出ちひ出ちひ 源川の尾を
立生ゆゆゆ
芭蕉や竹の子藪ゆ老ゆ秀
物毎ゆ通ゆるゆゆ蜂ゆゆ
ゆゆし浜うゆ中ゆて学ゆ物毎式
仏ぬ物ゆゆ赤ゆゆ赤ゆ毎ゆ形
物ゆゆつゆて一ゆ八ゆゆ家の松
只物の大ゆゆ赤ゆゆ物式 去来

まゆ地ん小藪の中山ゆん鮭 菊
鮭食を生ゆて出ゆん初ゆゆ
松魚ゆゆゆ海ゆ人を殺ゆん
名ゆゆ海ゆゆして鮭ゆ形 生角
戸塚
鮭荷ゆ赤ゆ八ゆゆ式具式
帳を松浜ゆ舟小鮭ゆ磯ゆ色
ゆゆゆ森ゆ夢ゆゆ尺ゆゆ
ゆ生ゆ森ゆ夢ゆゆ元ゆゆ鮭ゆ
知生ゆゆ鮭ゆ
伊勢ゆゆゆ松魚ゆ人 海近
大勢ゆ中ゆ一本 松魚ゆ形 嵐雪

小鯵

鮴

鰷

売子り夢に戯る
下部にゝ鯵くはまる日や佛　、
きりきの魚売时
世の中をきりきりおしおし小鯵売　千角
一種売販にて清行中に
おしいりゆりて
味噌きるにほしき鮴(ゴリ)の游(カヨキ)この形　嵐雪
名にしおへる鯖鯛とはふきのさ
見付らんと夢このみていはきなひ
やまをしにも人を縮業山の木か
市に薄をまつけ要をあらて
すゞむなくひあのその川瀬鮎鰷　翁

袋角

笈ノ小文笈日記ニ鹿の角先一ふしのわかれかなアリ

蛍

延宝八九年ノ吟ナリ

泊船蛍犬ニ誤ル

石垢り精るゝ入るや瀬の鮎　去来
舊友に寄せ申てわかるゝ
二とせぶりにわかれみて花の角　翁
蓬ありつゝく前(十八ケ)を注ぐ蛍の爪　、
蓬ある前に助あるの蛍の影　、
木曽路の旅姿にて大津
ありてまゐる瀬田の蛍見に
出て
あれぬ草田毎の月にまゝん見ん　、
草の葉を落るより飛ぶ蛍の影　、
上林を入る
蛍見や船頭酔ておぼつかな　、

地の火を本くの草や苔の岩、
苔の石ふ赤い夢くふ苔の松　生角
宇治より
紫みすきの苔くさくさする草の松、
墓所にて朝くふふ苔の松、嵐雪
曲水ふいさふさくさ野四の
草ふんすりかのり苔ふ夕への紅
流をふ行きてたりぬる紅
苔ハ松ふをきしてし
春る火や黒津の橋見ふ高　玄来
草火や吹くさくさ塔の苔、
妹千ふ分きのり苔ふ

手のうへふ小くきゆ草ふれ、
きしりに草の中や苔の水　文学
苔苔をもふ草の和苔の松、
ふふ草の火や草の苔の孫、
岩清水門寺の滝
草火や　村中ふふ滝の水、
曲水の子を物
好奇ハ張ふ苔くさのさう松、
緑ふ浜廉石のみびをわく、
ふふ苔くいり苔浦氏のあ村
きをふ苔をやふふ尽ハ水
紙し苔や草きのを移て

蝸牛

類想子三音文アリ

人の世に栄花をきそふ事
つくつくり角やりをけづる法ヶ岳の石
蝸牛海のさまの形ふ迷せ中刺手角
鏡宮和歌の一の角をつくつくり
牡牝の栄和歌に芝角形きに蝸牛
文七そうふ中に芝角形きに蝸牛
きつ義和角ふ明を乞つ蝸牛嵐重
坂東の宮つくきつ大きふ鏡東
つくきる大きき屋の蝸ふ具足
くたカの抜りふ中に作り
中をきを持てる人のあわあく
弱中世宮の形ハ中

蛞蝓

雨蛙

蚊

蚊遣 ちびきき トアリ イニ

このこうの兵具持ち来作り
きき中中半る心きこうける
高めて中り迷て光る和古具足
雨後
面蛙を世鉄ふ乗てきき中里 牛角
大を打ふ形ふ時ふ面ふ人る 丈子
林の板を幻作屋ふくめて
系ふ中を板のちびきを張弦弓 高
板きて中ふ夢のうき格のる高 牛角
中の仮屋のふせきて
雪作り茶うつ宮の板きう形
生知去来

此句ハ唐紙ニ蚊を漉ハ
ゝ書きゝゝゝゝ自註
アリ

烏形蚊ハいろ〳〵ゝゝ者の志ゝ

夜淡書

蚊をうちけやけ柳ゝ志ゝる本の宮（カサ）、

京長の句をゝゝて

柳の一ツ二ツを蚊の生ゝ也、

ゝゝし也庵の蚊清人を

御の志ゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝゝ蚊

美人の肌ハ志ゝ志ゝ寝て柳

ゝ蚊ゝゝ庵の蚊やゝ

蚊者ハ也ゝ〳〵ゝ蔵者者ハ岩也

本津ゝて

蠅

山ゝゝの蚊ゝ也中ハ咲ひ者ゝ去来

亟ゝ和ゝ志ゝ蚊ゝ蚊の浦ゝ丈ハ

うち敬ゝゝ

志ゝゝゝゝ

怖ゝ角毋

蚊者ハ志ハゝ志ゝ志ゝ悔ゝうゝ去来

枝葉ゝゝ者ゝ志ゝ者ゝ蚊者ゝ

許云ゝゝ木ゝゝ蚊ゝ吋二句

の中

うゝ人の拾ゝ蚊ゝ木ゝの堀菊

仲哥表

志ゝゝゝ志ハ堀ゝ打ゝゝ韓迫之生角

拔刈

梁の堀を渡てん馬のうへ、

射者中り疲者、

堀ちゝ いつきふあゝる點きゝ、

拔居

ちゝの雪堀を渡屋ふ跡りゝ、

新ゆつゝ 飯粒堀ゝあゝへ市ゝ 嵐雪

稻叩

ゝゝのゝゝの袴のゝ 堀の形ハ、

拔飯 逐堀

堀ちゝ 蝿る心ゝ子来ゝ、

きゝゝ世ゝる美ハ 諫ゝ巷の秋 千角

深吹和 巷の出ゝ行耳の宮 文学

和泉式部之石塔

木宮ゝゝ一生紙式部の自社

きゝゝ 孫ゝ ふゝ

納のゝゝ 宮ゝ秋のゝ ゝのゝ 嵐雪

きゝゝ 中学餅の樹ゝ出ゝん 菊

飯軽の 軽ゝの ゝ 軽ゝの形 千角

永代橋の茶屋ふ中ゝして

吹石ゝゝ 神ゝゝゝ 軽の巷

海舟 船ふ海ゝゝ

貴ゝの 帖社 軽ゝふ ゝの形

云汲寺ゝて

夏雜 笈小文ニ月ハ春ヤ夏ヤ冬ノ季ヲ兼タル句ナノ夏ト二句アリ

笈日記ニひそかなる一禁ヲアリ美濃稲葉山の吟ナリ

シトハ奥ノ方言ナリ句モ又ソレニ従テヨムヘシ泊船集ニ誤レリ

蟬ハ春ナトモ紀行ノ時節ニテ、ニ出ス

終夕しをれて雨の柳かな　玄来

角を見てくれる物なくなれ沢庵の友　菊

武隈の松みな

折ふり折ふり末を三角あし　〃

山路かな

哀まさるる只ちる葉のひろふ水　〃

シトマヘ

屋前山家

雲風ふきのの屋ふきまくる　〃

書　吉

篇茅ハ高ふ弦石の田切り水　〃

清風ふ

ほとゝぎす鉢ヲ下の焼の煙　〃

五月 猿蓑ニ笠ヲ脱ト句ヲ細道ニ笠ヲ脱ハトアリ

金盥

売りのまめ又ふり　夜料理　李角

酒屋ふ茅屋ふ蛙ふ居をうつす時

門前ふ自由ふり　夜　青　玉来

葵ふ名所の野ふ入て中将実方

社塚ハふるふ　和ふ　最後ハ色

ふり一里ふ　ふ　左の方笠為

ふるふ　ふ　ふ降て

きゝすふ五月雨ふ　ふり形くらち

色ふ

笠為ふ　ふ　年月のぬり　色

きふきふ十日の月ふ出ぬ　為

行状記ニ箱根の関越ての吟なり ヨシ

五月雨 続虚栗ニ自詠トアリ 真蹟ニ貪主自言トアリ イニ自脉トアリ誤リカ

笈日記ニ色紙まくれしトアリ
韻塞ニ桑畠トアリ

目にかゝる時やことさら五月富士　丶

箱根越

篠(シノ)芨(ス)垣のしを発森の五月哉　千角

たましくは三日月むさ月の夜　玄来

その國にて

町中の山や五月の上り雲　丈草

病中自詠

髪生て容顔青し五月雨　翁

さみだれにかくれぬ物や瀬田の橋　丶

阿武隈川の水源にて

さみだれは滝降うづむ水かさ哉　丶

中尊寺にて

五月雨の降残してや光堂　丶

さみだれを集めて早し最上川　丶

日の道や葵かたむくさ月雨　丶

落柿舎頽(タイ)破(ハ)

五月雨や色紙へぎたる壁の跡　丶

さみだれや蚕わづらふ桑の畑　丶

露沾公へ申侍る

さみだれに鳰のうき巣を見にゆかん　丶

五月の雨風しきりに落て大井川水出侍りて島田八とゞめられ侍て島田よ逗留も此舟か行末

有磯海ニ空吹ケルキトアリ
書損カ

木賀温泉

炭俵ニ端午ト前書アリテ
傘ヲ付ケタルニ作ル

ふる人の許ふあらて
五月雨の空吹はらを大井川
雲うり新しかりしたのしきやかな
夏の河をきいすみたるをいすみ旅姿
五月雨や河の捲る山ふもとうつる
きくらふ新しき雲を出へし
五月雨や宿うちたるのつく雲
五月雨や傘ふ付る小人形
蒙古塚の大法寺を東叡山
うつあをきる
五月雨の雲ふ休むの法の雲

きみ多ケ原や赤ふ雲を西へ人
五月雨の石ふ山ふ法を長句哉
七夕の二のうつ長形し五月雨
鎌ぬくふ四方の雲やさ月雨
岩村田古庵
六尺ほ力地ふ山やまつき雨
三味線や森新ふくむさ月雨
山寺の五線し時や雲月雨嵐雲
きくをやや硯箱ふる雨つし
伏見接木町
炬松ふ月雲ふ月雲を行ふ市ふ
宮ふの古風形人へし

詞書猥雜ニアリ

五月闇

入梅

入梅晴　句集ニモ書きもれ　チラホラ空トス誤リ

行燈て夕霧遠く秋さ有る　白　丶
海の水まさりきつまあり　去来

雲々の味みて
はてしなくもてあそぶ　白　丶
五月雨の雲ふかしの紀伊の八景　丶
さくらかれの屋をうつす梅ひのり　丶
何をきく蛙蝦蟇ん　白　雪角

旅人をあるんとて
草枕や雲のあるうの鳥　丶
メメしくよこの水　丈雪

信濃の清路
入梅晴の日の雲不見ぬ　菊

幟

印地打

棟佩

粽

菊五寺ゆき

菊の太刀ゆ五月雨のまれ就の雫　丶
ちまよ井の末紫陽花　就　雪角

芍和太郎を望り芍和治郎
まとゐる

ものの足を岩を放つ　岩の雫　嵐雪
地ふ人うあ雲の紙のそ　雪　丶

棟　紙　わきめの　和芝青　丶
ちまきゆふ　ふ　ま　ま　郭髪　菊
文ものくロ上を　粽五把　嵐雪

粽一ものを金の納ものを来り
紙ものつ出きたり

菖蒲酒
加茂足揃
競馬
竹植
若竹

粽ゆひかた手にはさむ額髪　丶

廻文

市中ちんとのあやめ菖蒲の匂ひ海　其角

蔵ちらこの蹄に用ふや足そろへ　嵐雪

午の年午の月午の日午の時

とちに入る

競ふ時入分のりとこの行　丶

木因宅竹植日

降すとも竹うふる日はみのと笠　翁

雨雲や竹植る日の人あつめ　其角

若竹や鞁ふわのめる笠根山　丶

子につきての入るまてや若竹の竹　去来

合歓花　細道ニ象潟ヤニ作ル　泊船ニ西ヤニ作ル

棟花

栗花　伊達衣加れにやめくくかトアリ

菖蒲　延宝年中

タシ　足ト読ハ誤リカ泊船ニ緒アリ

昼顔や若竹ともに山にさく　丶

象潟や雨に西施かねふの花　翁

芝芝に芝つかひて

うれしさもあふちや雨の花さかり　丶

寓二桐葉一

雲見草飯食よりの日に照の　其角

訪二隠君一

世の人の見つけぬ花や軒の栗　翁

あやめ生り軒の鰯のされ髑髏(カシラ)　丶

留別

あやめ草足(アシ)に結ん草鞋の緒　丶

仙台にて呼わかれ　五月四日

志賀郡馬を入る云ひきわ死きゝ

ゆゝ

芝あゆゑん一枝ふ枯し　永馬永形　生角

鈴田を沼ふ寸し大ら芦蘭ゑ

根ゑゝわ法　法沈ゑ西ゑ生　蓮

五月ゑ云わ　ゝ

屋根蓍ゑゝ　ゝ

切ゑゝ元ゆゝ　ゝ

公門ゑ入ゑ

芦蘭わ　ゝ

志ゑり屋の　ゝ

ひゝ力　ゝ

石菖

紅花　西花集ニ翁ノ句ナルヨシニ云リ

紫陽花

瞿麥

あわ花ゑか義の伝授ゑ義ロ　ゝ

白露を石苔ふゑゝ便ゑ形　生角

清風ゑ二句

行来ハ旅ゑ　ゝ

肩掛ゑ地ゑの弟ふして弟の義　ゝ

蔦ゑ翼わ　ゝ

大津の絵ゑ出て　生角

あちゝを石苔ゑゝ義ゑ　翁

ゑ珊ゑ

赤酒義わ小屋の別生義　ゝ

紫酒義わ蛾ゑ時のうゝ酒黄　ゝ

張ゑ蔦ん義ゑ　ゝ

咲ゑ石の上　ゝ

百合

藜

田植

西成氏の像

織肝石心は人の情

あらしの中ふかの雲やはなの露

百合の花形さぬ先ふうつむきぬ　其角

白百合の音

やうやう藜の枝うちあらはす　高

芦雁

田一枚うゑあてさきる柳　の影

陸奥の名ふくしゐ心はせたるあ

まつ冥屋の行ちつきまうう

ふるを也ゆうまでいの白川は出

しぬ杉で思像形ふ到て

代掻

早苗

古家角等鮫子の茅屋を

訪くこの陽冥を出て有人ふ

風流のもてなし見やう冥の田うた唄

義田氏の音

某つ弟しこの子のうちやう田植歌

田うたあまて水菜屋はるの角田川　牛角

移形ふきうの子たる田うた歌　お子

尾張の春を冥はる

世を捨て代のくみはのうちうう　高

盛砂子

西をうくはるふるまはまは苗歌

奥州にての白川にて二句

西か東かまづ早苗にも風の音　、

早苗にも我色黒き日数哉　、

志のぶの頃志のぶの里といふ所に文

字摺の名跡とて方二間ばかりの

形ち石あり此石昔女の想ひにて

石となりて世に残ると云ふ事あり

このや山藤よりこゝにもたらし故あり

庭に寄せて多くよあり今も

出あり埋て石の面は下さまに

成たれは其風情も見えて

侍るとかきこの不易知らえて

早乙女

桃実ニ畑ホテモアリ

茄子

十二月の頃に作ル

形つの一岑を見て

早苗とる手元や昔しのぶ摺　、

早乙女やよごれぬ顔は朝ばかり　去来

早乙女の足洗はする小川哉　、

早乙女にかへてとりたる菜めし哉　嵐雪

重行亭

めづらしや山を出羽の初茄子　翁

島田にて

蓬生のあまりて茄子の汁　、

すゝき木もて茄子もるゆふべの形　其角

將曹湯女妻

五月雨の妻あまる宿の茄子漬　、

風花

水鷄 雪九二ふるものをトアリ

何世松浦先ゆく古き世歌
紅の色をいかなる年てゆふ長絵の袂
鶯を買て籠に生ましめ蓋
機織の中なり
紅の色衣いのるる思ひ出
色色衣一度ふ所の袴の形
幻住庵ふ所生るる
夕山の鶴の法のそうりの色
白川の河のふ文法の
長き
冥土の家を水鶏ふ同きうの
大津絵仙

水札 小鳥二似タリ水鶏混スベカラズ

去の家を水鶏ふ家の形
霧川ふ
送
家ふ
水鶏ふ人の
自慢
秋山を毋森ふ水鶏ふ
水鶏ふ秋ふ
鶏ふ

仰木の
秋の家ふ
水札ふ

鳥浮巣

鶯音入

照射

仲夏雜

六月

水無月

あつき人の家堂みて　宝角

岡川や塔のうき巣ふるくのこり　岩堂

夢の声を入あやめふるつるし

弓杖ゑ新ゑ新のうつるれ　〃

五月雨ゑ家ゑ蓑ゑ中ゑ母屋ゑ　〃

六月や峯ゑ雲ゑ雨ゑ山　〃

水無月八ゑ病ゑ中ゑ暑ゑ　〃

水無月や朝八あさゑ涼ゑ　〃

独国殿のゑ屋ゑ　〃

月ゑ

杉の葉ゑ青ゑ六月の法師ゑ　宝角

水無月の年ゑ生ゑ　去来

氷室

炎天

暑

泊船ニまゝしきヤトアリ

暑き日再案ナリ

新庄屋源亭

水の地ゑ氷室ゑつぬる柳ゑ　〃

惟然ゑ行ゑ師ゑ送ゑ

炎天ゑ出ゑ神社ゑ移ゑ金　丈子

柳の口ゑ高ゑ蔵ゑ暑ゑ木ゑ　〃

あつきゑ法ゑ入ゑ宗上川　〃

ゑ雨の末城ゑ通ゑ暑ゑ　宝角

小女の常ゑ涼ゑ夏ゑ　〃

俳九郎ゑ拾ゑ屋ゑ　〃

新庄家の宗屋へ入ゑ暑ゑ　〃

榜村ゑ時ゑ通ゑ木陰ゑ

あまき砂の上ゑ漁夫のゑ

白雨

[illegible]
[illegible]
四り付て[illegible]海の上　嵐空
地を[illegible]
朝[illegible]の二葉ふうくゝ[illegible]　玄来
[illegible]
義濃然板人[illegible]の板ゆ
[illegible]
同　同　[illegible]
夏[illegible]
葉[illegible]
[illegible]

自註ニ望日雨ふりトアリ

烟雨村

夕立や洗ひ去る山の色　〃
白雨や稲穂の芽長き白ひえ　〃
うく[illegible]
夕立や蕚[illegible]
市中白雨ふる
蕚の[illegible]
牛窓之遠の神おろし　〃
雨[illegible]
夕立や四[illegible]
夕立[illegible]
波芽の[illegible]

雲峯

涼

天和ノ吟ニヤ

仝

宇陀法師泊船ニ腰長ヤトリ

小夫丈ら赤石を稱しを
ゆくくとあくる角や雲の峯　丶
海や暮きぬらし　雲路ゝ秋
塔婆の心ちのすや　雲の峯　生角
暮ぬつや　鶴の尾の〳〵の雲の峰　去来
夕ゝ雲や　瓦ゝ雲の峰　丶
文鰐子出山の像を拜ゝ
市雲ハ
面白仏ゝの雲出ゝし　この雲　菊
松風の音紫ゝ水の音ゝし　丶
汐越や　鶴脛ぬれて海ゝし　丶
清風亭

西濱ト前書アリ

茂日記ニ見ユル歌ノ下アリ

削ノ外忘水ニ

初業 長野ノ四季ノ景ノ歌アリ

布袋画讃

きくしき城高みかしてを称する也

深しさや不の字自の四黒山

小鍋さきて柳さくしやあ士ら軒

十八樓紀あり略さ

山あらう用小見ゆるの時さくし

空水の新宅

きくしさハ拾遺うを見ゆる俗ひ

雪芝宇

深しさや雪小雪形り枝の形

雪の宇

きくしさを絵小宇しう嵯峨の体

きくし様の拾の形うきく

七十八

角

きくしさや先むさし雪の深を星

人のうをのうをめを

きくしいうう森をつ鉢う刺美心

木号絵うや きくしき体を きをう

夕業はきくしき風の姿の形

水車の乗をう手を

深さや心うへうる 水の色 岩雪

埋火をきくしうあう形的うの

法東生ハ堂中を美光寺

如来 界性の

きくしさの雪小ふうう志仏我 去来

深さよ夕立形のう 八日 の年

許六餞別文アリ 畧ス

納涼

きしきやゆのうへの雑魚競　、
蘿鬢の時
きゝ風うきゆゝを金のやうに　よ子
小屋風うゝ山里きし脇の上　、
きしきの心をゝ形し苦うらし　、
涼きうゝ森よりゝ出のくるゝ　、
丈山の像
きこのきゝ中のうゝ屋をこの中を探きし　、
丈山ゝ市中若熟
きしきを見きゝゝうきゝ塀の杉　、
四絃のこのふ家の宵きゝみ　菊

いのち形うきこの金殿下きを　、
袖の浦眺望
あつゝ山や咲うこのきゝ夕涼　、
花のうへきゝ桜きゝ山ゝ鉢淵寺のきへ
きゝ桜ゝ形ゝ新法をひゝせる夕　、
うゝ鉢ゝ
晴いゝきゝ中を八　、
夕きゝ中ゝ桜みきゝ色法の花　、
破風口うゝ新中踊る夕きゝ　、
風瀑銘別
わきゝきゝ八小杉の山中みを深め　、
東武ゝ上ゝ人ゝ小家き

韵塞ニヤの字ナシ書損ナラン
細道ニあつゝ山ヤトアリ

彩案唐破風の入日やうきゝ
トアリ

天和四年の吟ニヤ

東後の毛膳さうの一座きこ、
曲翠亭ふ者ふ者て四家こいへる
歌きこ
飯あふ〳〵から張走中夕きこ、
四条の河原の納涼こて夕自歌
の状こうこ自るきあて川
中ふ床をあへて歌きこのう河
のこ物こひきふ女八帯の張めい
こうあこく男八四縁きう者ふて
法法者人こふより八う梅屋
縁治屋のてときいこう河
顔ふのしるきこのう歌の

東京ふ人へ
川風中こうき柳者きる夕きこ、
菊こう文ふ歌のきこる
文こうこ風うあうるこ
て形こゆえ市こうきこ
丸山の源こあこを深こう形こ
丸東を毎う供こふ死の
青きこのへる
吉毎う者ふ者ふ形しタ雷こ、
韓退こ格河あり
河原のこ毎きうこ中玉源こ北、
春う家の不こう川走の源こ北、

此手水葉変器ノ格ナリ
初輩心スヘシ
松濤三同吟アト共角カ
自画賛アリト青原云

牛の古家

見やらぬ形の人下ちて、
舟を乗て行て家の形、
淀の川岸に柳深
昨人去て毎年ちる深草の、
夕ちるみちる男ふ生ける、
河原少し、
曉を牛ちて車の形、
布袋の絵
寒うちちる伏部ちふ夕深、
深毎沼ぬうあらし遊ひうれ、
自棄

誰為ち新田森夕ちて、
川原の古家
ちる水の形水ちふ深ふ北嵐ち
大ふ心犬を追ふ郭の古家、
夕ちみ成童部て陶ち玄来
立寄て人ふちて深ふ形、
町ちちハ寄りの如ちて夕ちて、
文る歌ち深ふ俤ふ深この形、
物の子社中ちちふ、
紀伊の芦代を通り市る古
昨所ふ京ふ市童家の未今う
ちうちふ及ひめ世ハ弱入侍り

青嵐

しハ門箆枕押迎へし　胴たる
馬ハのきいゆる矢の根立のまり
了はりき武士ありけり庭ハ
いかし人への弓掛杉ちる
今ゟあり
葉しけや老ひしき門ふ立涼み　、
涼み立て帆ふふる袖や涼ミ舟　丈草
あつ聖や水てすゝむ夕涼　、
書斎の杉ぬ事や澳（オキ）の昼ゆるゝ　、
接（スヽ）果しまゝのあつれ探の内　、
青嵐といふ題を
海杉のまうり杉のあをしや初瀬山　、　其角

風薫

盛信事ニテトアリ
若葉ニめくる薫風の青引
初案ニヤ
句撰ニ羽織ヤトアリ

青あらし定まる時や苗の色　嵐雪
義仲寺師父の廟
吹くしむ形のりまるの爪青あらし　、
風の香も南ふちのし宗上川　蕪
羽黒山にて
ありかたや雪をかほらす南谷　、
勝力亭
涼や風のかほりの花柚子　、
小倉山境
杉杉を吹めくるやかの香る青　、
石川丈山の像
風かほる羽織ハ襟もつくろはず　、

尊 三所帝王至宝の寺ヤトアリ

打水

清水

芳の洲明きらゝ也

恵あり水宝珠の玉和方の剣乃

曲水の拾あり古水を地ゝ

出ゝ

清ヤあゝ嘉き清の井 経 手角

水うゝヤ 埋ゝ也ぬゝ 経

四梅庵

打水ゝ 跡ゝ也 梅の井 文字

ゝ井奥あり 這の清水 式 菊

時阜山ゝ

埋ゝヤ古井の清水ゝつ同ん

形須の温泉明神 相殿ゝ

八幡宮を選しまりてあ神

一方ふあ生ゝ

河ゝ也ゝ山ゝの石同石清水

草の葉ゝ高ゝ出しゝ凡 手角

序合治世ゝ作りて楽よ

り大和語の歌ゝ和歌の名ゝつ

移ん〻出ゝ事ゝ義紀ゝ

しゝて

神奈川の高の清水ふ為ゝ 農堂

紀伊堂井の清水

ゝの移ゝ生ゝ出ゝ山しゝつ

六玉川の紀あり

泉

白雲の泉はいとりいと清水
かりそめ文書りまきとり

土用干

雨乞

六月の雨乞のかの清水の形　去来
むすぶよりそれ迄ふるく苔の形　翁
千子の国より去来ら方へ申し
うつり
なきの人の山神もいまはむかしし　
うち〳〵森和尚屋ふ以来土用干　生角
荻葉きて出て出て出て出て土用干　
姫宮しの時の松ら申おし　
中子木ふ子て土用干　
縫葉て つの老たらん土用干　去来
白雲の雨乞ものかるかる葉　丈子

冨士詣

祭

蓮

梅林寺を立出て
雨乞ふ先ら寺山中　破笠
白雲ら思き家和不二山ら　生角
鉢ふの〳〵人敷きもひの形　
高岡を立ら谷のきもひの形　
木宮主馬ら宮ふ拍子ふ
夫ら山名を縛して
華の葉ら用きのもの和尚の墓　蓮
枝葉て学ふの〳〵ぬ華ら　
深笠ら清水を出り華の森　丈子
浦舟の形〳〵ふ白ふ華の形
遊女ふ宗画供

藻花

藻の花や落ふる雪に水の生る　雀

藻の去や重魚ふるいよ菴　〃

拾遺

浮草の寄るかたもなき水に流る　雀

見る人や青田を出る魔の家　丈

松のもの中さき青田のそよぎ風　〃

悔農ヲ

青田

萍

焼畑の皆中ふあつ一四方に雲角

麻ひとや中家へ入るとき水車　〃

遠恨意

青酸將水

麻

高高や高ひとの青き青鬼灯　嵐雪

甲斐山中

山吹の開ふ岡る垣ひとこの水　義

高ひ顔ひとり朱つき浦ひあせ　〃

ひる顔のうつろ秋吹る色写風　〃

子供ふよ色顔さきぬ広ものん　〃

平四季由ひ併へ文の青信ひ

色顔ふひとの森せうこの床の山　〃

夕ひの夕や碎て新出ち蕙の宮　〃

夕新ふ千蕙ちひて越ひて　〃

色顔ふ朱橋浦色あせち

故篇の向を移ひこの世て横

のひ世あひひ社絵ハ夕ひの

萍

書顔

夕顔

[illegible]を書[illegible]句[illegible]の[illegible]
[illegible]る[illegible]自句を書付る

夕顔や一日の[illegible]の[illegible]の[illegible]　[illegible]角
[illegible]や名を[illegible][illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]や[illegible]を[illegible][illegible]　[illegible]
[illegible]
[illegible][illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]や[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]角

凡

初茶[illegible]の七[illegible]

鬼の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

真桑瓜 延宝ノ頃ニヤ
イニ四ツ割ニ……

まつりしに將士妻争ありし
きヤ義家に仰て瓜を割
ふゑふに妻争る出下略
瓜切てさむる叔のひのり 嵐雪
雲の夜ゝ松下さふ玉眞桑 翁
初眞桑あてゝ小知らん隔小知らん ヽ
柳行李浮萍ハ古し初眞桑 ヽ
之ニ古ニ節して
我中瓜ふふらに割し眞桑瓜 ヽ
母の乍知るく泣出す眞桑瓜 其角
児の手の玉ふる白まる眞桑哉 嵐雪
曽年

瓜茄

羽抜鳥

蝉

ぬかの味噌に年を経ん瓜茄子 其角
提尾牙の飯焚すりより常に
盆の一里へひつる畠の瓜茄子 去来
悼杜国
羽ぬけ鳥何をうつのりて志き 其角
梢よりあたゝに落る蝉のからり 翁
稲葉山
撞鐘のひゝくやうなり蝉の声 ヽ
立石寺にて
志つかさや岩にしみ入蝉の声 ヽ
無常迅速
頓て死ぬけしきも見えず蝉の声 ヽ

蜂ちゝやゝ木ゝ小ゝうゝ生ゝ面ゝ実　生角
蜂のゝちゝの木ゝ少ゝ中ゝ芸ゝの寿　丶
蜂をゝき中一ゝ峰ゝ六ゝの時ゝ　丶
八河ゝの人ゝ木賀をゝうゝ
蜂の寿ゝ中ゝ少ゝ長ゝき　樹ゝの形　丶
六ゝ木ゝ木ゝ
下ゝ中ゝゝ地ゝ生ゝの蜂ゝ形　嵐雪
ゝ形ゝのゝふゝ　ゝ芸ゝゝゝゝ蜂の寿　丶
ゝ芸ゝ形
蜂ちゝゝゝ中ゝ麦をゝう芸　三ゝ三　丶
住ゝ人ゝの松ゝ芸ゝの寿　去来
梅木寺ゝ峰ゝゝ

大取虫

川狩

帷子

自書ニカクアリ諸集ニハ衣ニ作ル

麻頭巾

蜂ちゝゝゝ中ゝ芸ゝの寿ゝ形の山　丈子
雷のゝゝゝ出ゝ市ゝ大ゝ出
新撰
更ゝ五ゝ四ゝ手のいゝ芸ゝ光ゝ　生角
拙行
帷ちゝ丶ゝ行ゝ出ゝの形　丈子
門人杉風生涯の料ゝゝ芸ゝ
紙ゝゝ地ゝ芸ゝ
いゝゝゝ我ゝ長ゝ布ゝ芸ゝ蜂　文国
芸ゝ
うゝゝ麻ゝ中ゝ丶ゝ行ゝ麻頭巾　生角
不奪二百姓膏腴一ヲ文撰の詞也

一夜酒

道明寺

心太

万性の志ゝる油や一夜酒　生角

不ト の母遠蓋

水むすゝあゝまんたすゝ　道明寺　菊

貝うる家の男の見ゝ妻の末

盒ふゝ　てゝら拾へてう

ちかめ　ゝ水をたて

笠のつゆふたうゝゝのきん　寺　嵐重

野明　寺

清流の水汲よせて　心太　菊

明神のよゝる末のゝゝ　仏右　生角

乗ゝの春林武江の寺社ふ巡り

ゆふゝる壹仏　夫神君を巡り

振舞水

水彩

水飯

洗鯉

の春ゝ　ゝ　ゝ　

秋近

御稜

大津木[illegible]

秋ちの[illegible]四[illegible]　[illegible]

大雨大風

吹降の[illegible]

清稜

[illegible]の日[illegible]東小の[illegible]より出て

西北の[illegible]

の頃之[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏雜

[illegible]の[illegible]

[illegible]　[illegible]

井[illegible]氏水橋

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一翁四拾集上終

中村俊定文庫